

正念場と絶体絶命と希望^{ひらかれ}



鎌田東一 (京都大学名誉教授、上智大学大学院実践宗教学研究科特任教授・同グリーンケア研究所所員)

1951年徳島県生まれ。國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程単位取得退学。博士(文学)。岡山大学大学院医歯学総合研究科社会環境生命科学専攻博士課程単位取得退学。京都大学こころの未来研究センター教授等を経て現職。著書に『身体の宇宙誌』(講談社学術文庫)、『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読』(岩波現代文庫)、『霊性の文学 言霊の力』『霊性の文学 霊の人間』(いずれも角川ソフィア文庫)、『世直しの思想』(春秋社)、『世阿弥』『言霊の思想』(いずれも青土社)、『ケアの時代——「負の感情」とのつき合い方』(淡交社)、詩集『狂天慟地』(土曜美術社)などがある。

KAMATA Toji

いつも「正念場」だと思って生きてきたが、自分も国内外も最近ますます「正念場」を迎えている。

「正念場」は「性根場」と書くこともある。歌舞伎の舞台上でその人の本来の姿や神髄が十全に発揮される場面を指し、肝心かなめの急所を表わす。

私は20歳前後からずっと「逆境に強い生き方」とは何であるかに関心を抱きつづけてきた。人生には必ず「逆境」と言えるような危機的な状況がめぐってくる。

しかし、いかなる「逆境」に出会っても、それを切り抜けていくことのできる力や方策や出来事は生まれてくる。それを人は「奇蹟」というかもしれないが、それは奇蹟ではない。現実だ。

そんな奇蹟のような現実を『古事記』は天の岩戸開きの物語として、また八岐大蛇退治の物語として表現し、前者においては「祭り」、後者にあっては「詠歌(歌を詠うこと)」を解決策や事後始末として描いている。

これは『古事記』の生存哲学であり、逆境突破の「ひらかれ」のかたりである。最大の危機を脱した生存哲学と生存事例の提示である。祭りをすること、それは死と再生の希求劇だ。そこでアマテラスは一度死に甦る。その甦り策を、中臣藤原氏の祖先のアメノコヤネが祝詞奏上し、忌部氏の祖先のアメノフトダマがみてぐら(幣帛)を捧げ、猿女氏の祖先のアメノウズメが神懸りして踊りをおどることで成就した。それが大成功を修め、その後日本ではさまざまな危機の時に祭りをを行うことで各種の危機を切り抜けようとしてきた。

しかし今、コロナ危機では「3密回避」を社会的に要請され、伝統的な生存危機の脱出法に制限がかかっ

ている。少人数で神事を行うことは可能だ。だが大勢が集まって神輿を担いだり、歌をうたったり、踊りをおどったりすることはできない。密教で言う究極の即身成仏法であり、仏と一体化する「三密加持」とは真逆の概念とディスタンスの取り方が「3密回避」である。

この「3密回避」やソーシャルディスタンスが要請されるさ中、私がこの「正念場」で見つめ直そうとした脚下照顧は、足元に広がる比叡山を歩行することと一人でできる行為である。

これについて2つのことをやってきた。1つは東山修験道と称した比叡山登拝と山頂のつつじヶ丘で天地人三才に捧げるバク天3回を続けること(2022年2月1日現在762回)、もう1つはその様子を動画に収めてYouTubeに配信することだ。

ソーシャルディスタンスの根底に、豊かなネットワークを包含するエコロジカルディスタンスがあり、その上に伸縮自在なメンタルディスタンスやスピリチュアルディスタンスを生み出すことができる。その究極が「三密加持」なのである。

簡単には大きな危機を脱出する万能解決策は見出せない。けれども、等身大のセルフケアの場からもう一度エコロジカルディスタンスとソーシャルディスタンスを組み直し再構築していくことは可能だ。その自分なりの「正念場」を『絶体絶命』と題する神道ソング集のサードアルバム作りに込めている。この「神道ソング」は「八岐大蛇退治」をしてスサノヲが歌ったワザの継承と展開である。『絶体絶命』を歌いながら「岩戸」を開きたい。その一念でこの「正念場」を生きている。

〈特集イントロ〉 少年時の正念場

吉岡 洋 (京都大学こころの未来研究センター特定教授)

YOSHIOKA Hiroshi



1956年京都生まれ。京都大学文学部哲学科卒業、同大学院博士後期課程単位取得満期退学(美学美術史学専攻)。甲南大学文学部教授、情報科学芸術大学院大学(IAMAS)教授、京都大学大学院文学研究科教授等を経て、現在、京都大学こころの未来研究センター特定教授。専門は美学、現代思想、情報文化論。著書に『情報と生命——脳・コンピュータ・宇宙』(共著、新曜社)、『〈思想〉の現在形——複雑系・脳空間・アフォーダンス』(講談社)、『情報の宇宙と変容する表現』(共著、京都造形芸術大学編)、『〈こころ〉とアーティフィシャル・マインド』(共著、創元社)、編著に『光速スローネス：京都ビエンナーレ2003』(京都芸術センター)、『岐阜おおがきビエンナーレ2006——じゃんけん：運の力』(情報科学芸術大学院大学)、『文学・芸術は何のためにあるのか?』(東信堂)、訳書にブルース・マズリッシュ『第四の境界——人間—機械進化論』(ジャストシステム)、ハル・フォスター編『反美学——ポストモダンの諸相』(共訳、勁草書房)、マーク・ポスター『情報様式論』(共訳、岩波書店)など。「京都ビエンナーレ2003」、「岐阜おおがきビエンナーレ2006」など展覧会企画にも携わっている。

「正念場」というのは、浄瑠璃や歌舞伎などで主人公の「性根」、つまり本来の役割が発揮されるような場面を言う。したがってそれは、たんなる危機とか踏ん張りどころといったことではなく、それまで隠されていた本性が露わになることで局面が変わるという意味である。

自分の人生にそうした意味で「正念場」と言えるような場面はあったのだろうか。あったとすればそれは何だったのか。本誌にご寄稿いただいた執筆者の方々の場合にも照らしつつ考えてみたのだが、どうも私の場合は最近のことよりも、人生のかなり初期の段階で遭遇したある出来事が思い浮かんでくる。このことは今まで文章にしたことはないので、この機会に打ち明けておきたいと思う。

＊

私は幼少期に事故で父を失い、おそらく私の母にとってはそれが人生の正念場であったかもしれない。けれども私自身は当時まだ五歳になったばかりで、父の死に関してはほとんど記憶がない。ただ、そのこととどれくらい関係があるのかわからないが、私は小学校にまったく馴染むことができなかつた。とりわけ、男の子たちの集団——現代よりもはるかに荒っぽく競争的で、露骨な力関係に支配されたサル山のような世界——にどうしても入ることができなかつた。いわば「はぐれザル」だったわけだが、そんなにカッコいい存在ではなく、勉強も運動もできないし、ただ教室の隅っこでピクピクしながら、ひたすら下校時間を待っているような子どもだった。継続的なイジメを受けたことはないが、家

庭が女性ばかり(母と妹と手伝いに来ていた祖母)だったため、言葉遣いや態度に男の子らしくないところがあったようで、そのことでよくからかわれたりバカにされたりした。

公立の中学校に進んでからも、状況はほとんど改善しなかつた。ただ、母方の祖父母の家の近所に引っ越したことにより、すでに退職して家でブラブラしていた祖父の所に入り浸るのが唯一の慰めになった。祖父は勤め人だったが、青年期を過ごした大正時代の東京で文学や演劇にかぶれていた一時期があり、彼の書棚には戦前の文学・思想書がかなり残っていた。当時の私にはまだ自力で読み解くのは難しかったが、孫がそれらに関心を持つのが嬉しかったらしく、読み聞かせたり教えてくれたりした。別に学者の血筋でも裕福な環境でもなかつたが、昭和40年代の小中学生にして明治大正の文化にある程度親しんだことは、やや特別な運命だったのかもしれない。

けれども学校ではそうした経験から得た知識を共有する仲間もおらず、相変わらず勉強もスポーツも苦手な、ほとんど目立たない生徒だった(読書のおかげで国語だけは少しできたが、時々旧漢字や旧仮名遣いを書いて、ふざけるなど直されたりした)。運動部にも入れず、学級委員会で発言するようなこともなく、生徒会活動にも無縁だった。その中学にはかなりタチの悪い不良グループもいて近隣の学校から恐れられていたが、もちろん彼らの仲間に入ることもなど思いもよらず、なるべく関わり合いにならないようにしていた。

＊

そんな中学2年生のあるとき、学内で弁論大会というものが開催されるので、各クラスから出場者を1名決めることになった。「民主的」に、クラス全員で投票をして決めるのだという。もちろん私は、そんなことは自分に無縁だと思っていたので、何の関心もなく、クラスで一番弁の立つ学級副委員長の女子に投票した。ところがいったいどんな根回しがされていたのか、開票してみると数人の候補者の中に私の名前があり、そればかりか、誰もが相応しいと思うはずの候補者であるその副委員長に、私が僅差で勝ってしまったのである。何人かの男子たちが歓声をあげて騒いだ。おそらくは、弁論大会で話すなどいざばん出来そうもない私のような奴に、何人かで巧んで投票したのだらう。まあ、一種のイジメである。担任の教師をはじめ、誰もがそうだとわかっていたが、「民主的」な投票の結果だから仕方がない。私は弁論大会に出ることになってしまった。

今から思うと、どうして自分にはとてもできないとすぐに言わなかったのか、担任の教師や家族になぜ訴えなかったのかと思う。恥ずかしかったのか、言っても無駄だと思ったのか、とにかく私は自分の中に抱え込んでしまった。かといって、覚悟を決めてその準備を始めたわけでもない。どうしたかという、何もしなかったのである。1ヵ月後に全校の生徒や教師たちの前で話さなければならぬという逃れえない現実から、心の中で逃避した。つまりそのことについて考えないようにしたのである。逃げるダチョウが砂の中に頭を突っ込んで、自分に敵が見えなければ敵にも自分が見えないと信じる（これは作り話らしいが）みたいな感じだった。だがもちろん、期日は容赦なく迫ってくる。

＊

とうとうその日が来た。仮病を使っても、近所のかかりつけの医者

連れて行かれたらバレてしまう（仮病の常習犯だったので）。仕方なく私は登校した。やがて時間が来て、全校生徒が体育館に集合するように放送があった。私は登壇者の列に座らされ、審査員席には生徒会役員たちや、何人かの教師が座っていた。登壇者の中で私だけが原稿を持っていないことを見咎められ、すごい、全部憶えてるのかななどと冷やかされた。何番目だったろうか、しだいに出番が近づいてくるに従って、周囲の光景が自分から遠のいていくような錯覚が生じた。長椅子にぎっしり座らされた生徒たち、体育館の高い天井に反響する発表者の声や拍手が、まるでテレビや映画の場面のように、現実感を失ってゆき、自分の周囲の空間だけが、そうした光景から切り離されているように感じた。

ついに私の名前が呼ばれた。私は静かに立ちあがって壇上に登り、自分を注視する大勢の聴衆を見た。最初ざわついていた生徒たちは、私が何も言葉を発しないので一瞬静かになった。ジョン・ケージが「4分33秒」を初演したときのような感じかもしれない。実際には、そのときの私の沈黙は1分にも満たなかったと思われるが、私にはそれは4分33秒あるいはそれ以上にも感じられた。生徒たちが再びざわつき始め、もはや沈黙も持ち堪えられなくなったとき、私は口を開いた。そしてそれまで自分でも思いもしなかった告白、つまり自分はたしかに投票で選ばれたが、それは冗談のような企みで民主的でないこと、弁論とは言うべき意見を持つ者が行うべきで、無理にこんな大会を形だけ整えても意味がないといったことを、おそらくはたどどしい口調で、短く述べた。そして笑い声や罵声を浴びながら壇を降りた。

当然ながら私の発表は最低点で、大会が終わって体育館から出る道すがら、何人かの生徒や教師たちから、一体どういふつもりだ、真面目に

やれなどと叱られた。しかし私は興奮しており、現実感が遠のいていたのでそうした叱責も心には届かず、呆然とただ出口に向かって歩いていのように記憶する。そして体育館を出ようとしたとき、戸口の前にたむろしていた3年生の不良グループのひとりが私を見て近づいてきた。そしてタバコ臭い口を私の耳に近づけて、低い声でささやいたのである。「ヨシオカ、よう言うた。お前のんだけがおもろかったで」

＊

この事件が私の転機となり、それを機に積極的な少年に生まれ変わったなどということは、残念ながら起こらなかった。その後も相変わらず中学でも高校でも、私は気弱な目立たない生徒であり続けたし、そのとき声をかけてくれた上級生の不良とも、それを機に意気投合するなどという展開はまったくなかった。人生はドラマのようにわかりやすくはないのである。とはいえ、十代前半のころの自分の性格から考えてみると、その後大学を出て教育・研究職につき、教室や学会などで頻繁に人の前で話すことを生業とするようになったのは考えてみると不思議であり、やはりどこかに、のっぴきならない状況に追い込まれて自分を変化させるきっかけがあったのではないかと思える。やはり、あれがそうだったのだろうか。自分の人生において「正念場」とは何だろうと考えたとき、私にはどうしても少年時代のこの瞬間のことが、今なおありありと思い出されてしまうのである。

ステージトレーラー 遊行する移動舞台車

—— やなぎみわ氏・吉岡 洋特定教授対談



やなぎみわ 美術作家・舞台演出家。写真作品で国内外で多くの展覧会を開催し、2009年ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館代表。2010年から演劇活動を始め、舞台トレーラーによる野外巡礼劇、マシンを使ったユニークな公演を行う。2021年12月、台湾の衛武营国家芸術文化センターの野外劇場にて台日合作の台湾オペラ「アフロディーテ〜阿婆蘭〜」を上演。

フェイクの正念場をつくるのが演劇の仕事

吉岡 僕はこの2年間ぐらい文楽にはまっています。たとえば、文楽とか歌舞伎の『撰州合邦辻』のなかで、最後に主人公が殺される。お腹に刀を突き立てられて、もう死ぬという断末魔のときに、初めてその人

が、いままでずっと周りから誤解されていたけれど、本当は自分はこういう意図であんな行動を取ったんだと、自分の本当の姿、本当の思いを出して果てる。そんな場面を「正念場」と言います。

もともと「正念」は仏教の言葉で、「性根を叩き直してやる」の「性根」と同じです。その人の本質ということですね。だれしも人生のなかで正念場はあるし、世の中でも、ごまかしごまかし来たものが、もう持ちこたえられなくなって、本音を出さざるを得ない場面ってあると思うんです。でも、「いまがコロナ対策の正念場ですから頑張ってください」とか、言葉としてはけっこう濫用されている(笑)。

やなぎ 何度も聞きましたね。

吉岡 そう、何回正念場があるんやと(笑)。そこで、この言葉をもう1回見直したいとも考えたのです。

やなぎさんは、京都市立芸術大学で染織という伝統的な工芸から出発して、布を使って空間を埋め尽くすような作品を制作されていた。その後、1990年代に、『エレベーターガール』とか、制服を着た女性のイメージを生身の人間や

写真を使って表現するという、かなり大きな転換があった。それから、写真やビデオを使って、若い女性や、その人が年をとっておばあさんになったとき、どんな自分のイメージになるだろうかといったことをテーマにした写真シリーズなどを発表され、最近では、移動舞台車を使った演劇を始められました。

やなぎ ええ、演劇は2010年頃からやっています。

吉岡 やなぎさんはもともと演劇にはすごく関心があって、^{からじゅうろう}唐十郎¹⁾の状況劇場などを観て衝撃を受けたけど、美術の世界にいたから、発表するものとしては美術のものが多かった。でも、なかには演劇的要素があると解釈される作品もあります。

僕はそんなふうに理解していたのですが、台湾でつくって輸入されたステージトレーラーを最初に見たとき、圧倒されたんです。とても美しい巨大なもので、台湾にそういうトレーラー演劇というか、民衆娯楽があるのかと思った。それにしても、あれを見ると、やなぎさんが何かすごく大きく新しいものに踏み出す転機を迎えたと感じたんです。

美術家、あるいは演劇も含めて表現活動をしてこられたなかで、正念場と言えるようなことって何だと思われませんか。

やなぎ 演劇は、舞台上でフェイクの正念場をつくるのが仕事みたいなところがあります。あえて何も起こらない演劇もありますが、やはり何事か起こらないとドラマにならない。それがプライベートにも影響してくる(笑)。だから、美術から演劇に行ったとき、演劇の人たちはドラマティックに生きているなあ、とすごく思いましたね。

吉岡 最初の演劇『1924』のときからそうですか。

やなぎ そうですね。美術って個人表現なので、シンプルなんです。だけど、演劇は集団で、しかも全員がクリエイターです。それに、ふつう演出はスタッフ、演出助手から始めますが、私は最初からいきなり演出をしたいと思って、えらい迷惑もかけた(笑)。演出は周りを生かす立場なので、いかに俳優、スタッフに持っている力を出してもらって、全部のパズルが合うように最善の場をつくるかということなんですね。そこはいまでも一番難しいところです。

野外劇は人間の意思で完成させられない

吉岡 僕はやなぎさんのこれまでの作品を見ていて、単純に美術から演劇に移行したというのではなくて、最初から両方を持っていらっしやと思うんです。

美術の場合、基本的に個人のコントロールであって、しかも、非常に緻密にコントロールできるじゃないですか。演劇は真逆で、自分がある程度ナビゲーターをするが、相手にゆだねることが必要です。どうやってその両極端のサイドをスイッチしているのでしょうか。

やなぎ 私は最終的に野外劇をやりたいかったです。劇場は細かいコントロールができるんですけど、野外劇はまったくコントロールが利かないので、その場その場ということになっていく。でも、それが一番やりたくて、トレーラーもわざわざ日本に持ってきた。い



吉岡洋特定教授

まはコロナ禍で非常に難しい状況にありますけど。

吉岡 それは、上演だけではなくて、制作、プロセス、全体に関してそうでしょうね。

やなぎ そうですね。けっこうしんどいときもありましたけど、正念場を味わったかどうかはわからない。

吉岡 たぶん渦中にいるときはあまりわからないのかもしれないですね。

やなぎ 最前線にいるときは意外と冷静なものです。

2年前、神戸の兵庫津の港で海に台船を浮かべて野外劇をやりました。中央卸売市場の魚市場の人が海に特設会場をつくってくれて、もちろんトレーラーも来ていました。トレーラーで全国5カ所を巡回したとき、父が入院して死にそうになっていました。演劇は、絶対に現場を離れられないんです。神戸の海で公演していて、海の向こうにポートアイランド病院が見える。そこの8階で父が死にかかっている、野外劇が終わった後に亡くなりました。私も看病で半分病院で暮らしながら、野外劇へ行行って、オープニングをやって、みたいな生活。それが正念場と言えれば正念場ですね。

正念場と言ったら、瞬間的に来るものだけでなく、長い時間続いて、「振り返ってみればあの5年間が」みたいなものとか、いろいろあると思います。

吉岡 明治のころ、近代劇から伝統演劇が否定的に見られた理由の1つは、「こんなことはあり得ない」ということですね。切腹した人がいっぱいしゃべったりしますが、あの長さはすごく大事です。その間は特別の時間で、たとえば、歌舞伎とか文楽で、『忠臣蔵』の浅野内匠頭が切腹するとき、そのあいだは扉が締められ、観客は出入りできない。これは特別な時間だという演出をして、観客も納得している。それが正念場であって、日常とは違う時間が流れているという感じがします。



ステージトレーラーを使った「日輪の翼」新宮公演 2016年8月 撮影：表恒匡

やなぎ 野外劇はそれができないんですよ。ここは正念場だから、遅れてきた客は入れないということはどうもできない(笑)。

吉岡 それはそうですね。ノイズがいつ出るかわからない。

やなぎ そう。ここは大事なシーンというときに救急車が通ったり(笑)、小っちゃい子どもがトイレへ行ったり、あらゆる事が起こるので、それに関しては諦めるようになりました。

ただ、それを生かせるときもあって、たとえば、ものすごく美しい夕焼けが見える一瞬には、それをお借りする。パトカーが通るのはどうしようもないので、それに対抗するぐらい俳優が頑張るか、それを生かすアドリブをやるのかは、最後は演者にお任せするんです。風が強くて口を開くことすらできないとか、急な大雨で公演が中止になることもありました。だから、最近、大袈裟に言うと、仏教的な感覚になっているわけです。

吉岡 手離しちゃうというのか。

やなぎ 人間の意思で完成させることはできないということです。ここが美術とのもう1つの大きな違いかもしれないですね。特に西洋美術は、芸術は人間の意思によって完成するという考え方があって、美術大学ではそう教えています。だけど、野外劇はそうはならない(笑)。

吉岡 そうであるにもかかわらず、わりと若い人は野

外劇的なものに惹かれますね。唐十郎の舞台はテントで囲まれているけれど、最後にテントの奥が開いて、外の風景が見える。そのとき、大型トラックが通ったりすることもあり得るわけですね。そういうことに惹かれるのは、なぜですかね？

遊行する一遍上人

やなぎ お客さんのほうも「観る」というより「目撃する」という感じなんですよ。ご縁があったらちゃんと観られるみたいな。なんでそれに惹かれるのかはよくわからない。そういうのは絶対にいやという演出家もけっこういるんですよ。俳優が力を発揮できないなんてとか、命懸けで書いたこの1行が聞こえないなんてあり得ないとか。その気持ちはよくわかるんです。

最近思ったのは、うちが時宗²⁾だったからではなからうかと(笑)。私の家が時宗だということは、私もほとんど意識したことがなかったんです。いまの時宗は檀家制度で、浄土宗なんかとあまり変わらないですし、家のなかで踊り念佛をしているわけでもない(笑)。

ただ、神戸の実家の近くに一遍上人³⁾が亡くなった御廟があるんです。私が授業を受けた中学校の窓の下が、一遍上人が亡くなった御廟だった。でも、そのころは全然知らなくて。2019年10月に、そこで野外劇をやったんです。中上健次⁴⁾の『日輪の翼』という小説があって、被差別の地域のおばあちゃんたちが熊野

からトレーラーに乗って聖地巡りの旅に出る。小説では、伊勢・諏訪・出羽・恐山・皇居と行くのですが、神戸は来ないんです。でも、私のなかではそれは関係なくて、いろいろ行くことになったんです。

中上健次のご遺族の許可もいただいて、熊野大権現の嫁というシャーマン的な存在でもある熊野のおばあちゃんたちが一遍上人に会いにくるという設定をつくりました。だから、言わば巡礼劇なんです。京都公演では、東九条の在日韓国・朝鮮の人たちのマダンが参加しましたし、神戸では、一遍上人も登場させて、劇中で一緒に踊り念仏を踊ったんです。一遍上人役はサーカスの空中芸のスキンヘッドの男性がやってくれて、上から賦算——お札を撒いたりしました。

それをやった後、時宗のことを調べたら実におもしろい。鎌倉時代から室町時代にかけて、連歌、謡曲、猿楽——能ですね、狂言、日本の伝統的な芸能のほぼすべてはこの時代に始まっています。

あのころはけっこう踊り狂う時代で、アナキーなんです。日本史のなかでもかなり特別な時代だと思いますが、出るべくして出た。一向宗もそうですし、一遍さんもそうです。踊り念仏はいくつも出ています。

一遍上人はずっと遊行を続けながら、その場その場で野外劇を——「野外劇」って変ですが——やっていたようです。差別された人たちとか、ハンセン病の人たちもいっぱい付き従っていた。そんな集団が全国に行き回って踊り狂うわけですからすごいことで、プロデューサーがいなくてできないと思うんです。「一遍聖絵」の絵巻物を見たら、ショーアップもされています。それに、チケットをもぎっていたり、尼さんを踊らせて人寄せしているようなところもあって、興業として成り立っていたのではないかと思います。

吉岡 この前、京都国立博物館に「一遍聖絵」を見に行きましたが、びっくりしましたね。これは普通に言うところの「布教」とか「伝道」とは全然違う。やなぎさんがトレーラーで行くのと同じように、行く先々で、その人が突然感化されて、ずっとついて行ったりする。その人の人生を変えているわけです。

やなぎ そうそう。一遍上人が亡くなった後、後追い自殺とかしてますからね。もしかしたら、私は時宗の末裔だからということで野外劇に惹かれることを納得しようとしているのかもしれない(笑)。でも、そういうのが性に合うというか、唐さんもそうだと思いますし、演劇人はみんなそうだと思います。たとえば、水族館劇場の桃山邑座長とか、唐ゼミの中野敦之座長とかも、みんな舞台をつくることで呼吸している。私は40歳を過ぎてからやり始めたので、たぶん死ぬまでにちゃんと認知されないと思いますけど(笑)。

吉岡 そんなことはないでしょう。僕はやなぎさんの

場合は、最初から演劇の人ではないところがむしろメリットになっている部分もあると思うんです。

やなぎ そうかもしれないですね。

吉岡 中上健次の小説『日輪の翼』が出発点になっているけれど、それをそのまま演じるのではなくて、それぞれの場所で、それに関係するような、たとえば、神戸だったら一遍上人の御廟とか、そういうふうには拡大していく。そうすると、『日輪の翼』を核にしているんなものを見い出していけるという感じがします。

やなぎ そうですね。『日輪の翼』でトレーラーが高速道路を行くんですけど、あれは山の道を知っている修験道のことを言っているんだと思うんです。たまに下りてきて下道を行って、それぞれの聖地の神仏と交わる。神仏習合しているので、神でも仏でも何でもいいんですけど、交配するんです。だから、すごく性的描写が多い。私は野外劇を続けながらいろんなところに行き、いまは台湾の大衆劇をつくっています。だから、人生、何が起こるかかわからないと思っています。

吉岡 そういう東アジアの近代以前の宗教活動とかなり近いものが世界中にあったのではないかと思います。たとえば、いわゆる福音書の世界でも、いま僕らはテキストで読むから、イエス様の言葉に影響を受けて弟子がついていったというふうには思うけど、本当はイエス様ももっとパフォーマーというか……。

やなぎ 身体性が強かったと思いますね。

吉岡 その側面がたくさんあったと思うんです。そういうものがだんだん見えなくなってきているのを、もう1回甦らせるようになればいい。

演劇はものが残らない

やなぎ 仏教もそうなんですよね。一遍上人は全部焼いてから亡くなったんです。アーカイブを何も残さなくて(笑)、もちろん宗教団体みたいなものはないと言いつつ残して亡くなった。それで終わっていたら、それこそ何も伝わっていないかもしれない。だけど、一緒について行ったお坊さんの1人が絵巻を描いた。そこにはたぶん天皇か大臣級のスポンサーがいたと思います。絵巻は130メートルの、しかも絹本ですから、ものすごく高価な絵の具と絹を使って描かれています。そして一遍さんの教えを継承したのが二祖上人です。この方が踊りなどをアーカイブとして残すのが好きで、組織づくりがすごくうまかったので、ちゃんと宗教団体になったんです。

演劇が美術と違うもう1つの点は、「残らない」ことです。脚本は残っても、演出は残らない。古代ギリシア劇も、コロセウムの円形劇場とか、お面とか、そういう資料から、こういうふうには演出したであろう、コ



『一遍聖絵』巻第七 一遍上人が行った踊念仏のようす。舞台が設けられ、その上で鉦鼓にあわせて僧たちが踊り、人々が周りで見物している。 出典: ColBase(https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/A-10944?locale=ja)の一部

ロスは何何人ぐらいとか、メインキャストは全員お面をかぶっているとか言いますが、全部推測に過ぎない。

美術はものが残っているから、それによって美術史を作っています。演劇のほうって、ほぼ妄想？(笑)。それはすごくショックでしたね。妄想でこう演じていたであろうとしていいのかなと。でも、新しいものを創造するということでは、そのほうがおもしろいと思ったりもします。

吉岡 なるほど。残る・残らないですが、だいたい前、唐十郎さんがまだ元気だったときに、ある演劇を観に来て、打ち上げで唐さんが、「俺たち、こんなことばかりやって何が残るんだ」と言った(笑)。「みんな死んじゃうんだよ。何が残るんだ」と。みんながそれを聞いてうっとなっているときに、唐さんが「俺が残る」と言ったそうです(笑)。

やなぎ それは唐ゼミの座長からも聞きました。どういう意味で言ったのかはわかりませんが、俺は脚本を書いているから、その本は残るということではないと思います。それでも俺は残るってどういうことかな、おもしろいなと思いました。

吉岡 一遍上人だけではなくて、イエス・キリストだってソクラテスだって本を書かない。

やなぎ 親鸞もそうです。みんなお弟子さんの聞き覚えで、本当に言ったのかどうかはわかりません。

吉岡 つくり出した人たちはみんな書かないし、一遍上

人みたいに「残すな」とまで言う人もいるのに、残るものは残る。いま演劇でも美術でもアーカイブって盛んで、それは残そうということなんですね。

僕はロームシアター京都のリサーチの手伝いもしています。そこに舞台芸術のアーカイブをテーマに研究をしている若いリサーチャーが何人かいるんです。ふつうに考えると、舞台芸術のアーカイブってビデオや写真を残したりするんですけど、若いリサーチャーの人たちのテーマはそこではなくて、たとえば、それが初演されたときにどう受け取られたかということを残したいというんです。新聞に出た劇評などである程度記録はできるけれど、そういう記者や専門家が書いたものではなくて、それを観た一般の人たちがどう思ったかを知りたいと。でも、オーディエンスはふつう書かないですよ。いまはSNSで発信する人もいるけど、書かない人のほうが多い。それをあえて知りたい。それがアーカイブのテーマになっているんです。

やなぎ それはなかなか難しいですね。

吉岡 難しい。でも、そういうところに関心が向かう気持ちはわかります。

やなぎ 私はパリのコメディ・フランセーズに行って、演出ノートがどれだけあるのか見せてもらったことがあります。大きな資料室がありましたが、残っているのは興業的に成功したものだけなんです。人気が出てロングランになった公演は、脚本とイラスト付きの演出ノートみたいなものが金緑の豪華な本になってきちんと保存されていました。だけど、大半は何も残っていない。実験的にやったけど、興業的に受けなかったようなものはまず残っていない。

だから、演劇の場合、興業的な成功はすごく大きいんです。美術みたいに、当時はだれも振り返らなかったけど、100年後に評価が高まって、とかいうのはありえませんが、美術作品というのは、声にたとえたら小っちゃな声で、100年でも200年でもずっとぼそぼそ言っているような感じなんです。演劇は限られた時間のなかで全部大声で伝える。

結局、全力で球をいくつも投げても、お客さんはそんなにたくさん受け止めきれないから、何かすごいことが起こったけど、よくわからない。たぶんそういうもので歴史ができていて、唐さんとかはまさにそうだと思うんです。それで、「あのときはすごかった」み

たいな、お客さんの口伝えで残っていく。

あと、さっきも言いましたけど、演劇は集団でやることもあって、いろんな意見があり過ぎる。この部分は自分がつくったと主張する人たちもいますし、劇団が何十年も経つてくると、時代ごとに中心メンバーが違って、権利がはっきりしないために揉める。そこは美術と違いますね。

吉岡 そうですね。もちろん美術にも人間関係がないことはないけど、基本的にはわかりやすい。『1924』のときに調査された、大正期の築地小劇場なんかもそうですが、演劇って何か闇のようなものを感じますね。

やなぎ そうです、闇。築地小劇場もすごく短命でしたからね。築地小劇場をつくった土方与志^{ひじかたよし}は追い出されてしまう。『1924』をつくっているときにびっくりしたんですが、主催の劇場から、「ふつう、演劇の人たちはあんまりそこは触れないですよ」と言われたんです。

吉岡 僕らにはわからない、暗黙の掬^{おきて}みたいなのがある。

やなぎ 文学座とか、俳優座とか、長く続いている劇団もあるわけで、戦中の歴史に触れるのはタブーですと言われました。築地小劇場といたら、リアリズムの芝居で新劇の流れをつくった。そういうのを乗り越えようとする人たちが次の世代にいて、アングラもそうです。だから、演劇は人間で歴史ができていくのだなあと思いました。

唐さんのように、演出家が「俺が残る」と言うと、一緒につくってきた人たちがだれもついていけなくなる時がある。そこでまたメンバーが入れ替わるみたいな感じで、常に揉め事が起こる。でも、それもずっと起こり続けていると慣れてきて、「色即是空」的な気持ちになってきます。それはまさに演劇の舞台そのものを表しているのでしょう。

吉岡 そういうふうになくなってしまう部分とか、自分の計画やコントロールが利かない、偶然の要素に左右されてしまうのにも慣れてきて任せるとするのは、ある種、清々しいところもある。

やなぎ 確かにありますね。常にリニューアルしていく、何も残らない、即興で生み出していく、そういう道と、型として厳密に残していく、この二足の草鞋^{わらじ}で芸術、芸能はできているので、どっちが欠けても駄目なんです。ただ、この2つは常に拮抗関係にあります。

加速する情報消費のなかでもものをつくる

吉岡 僕は、いろいろな意味で、日本も世界も、いまの時代が正念場だと思っています。たとえば、この前、ロームシアター京都の講演で中高生ぐらいの世代の人

たちに向かって語りかけて、最後に「ご質問はありませんか」と言ったら、いくつか質問が来たなかに、「どうしたら成功できるでしょうか」みたいなのが2つぐらいありました。

やなぎ マーケティングですね。

吉岡 マーケティングなのですよ。でも、そういう子どもが嘆かわしいということが言いたいのではなくて、いまの時代をふつうに生きていたら、中学生がそういう質問を思いついてしまうことに、ある種、時代の正念場みたいなものを感じるんです。やなぎさんはいろんな世代の人たちと一緒に芝居をつくることを通して、その背後にある現代の社会とか生活とか、若者の世界観などで気づいていることはありませんか。

やなぎ いまは苛酷な時代だと思います。いくらデジタルが発達しても、ものをつくるのは時間がかかるんです。即席でどんどんブログを書いたり、Twitterを流したり、そんなスピードでできるものではない。でも、つくる時間は変わっていないんだけど、消費される時間はものすごく加速している。それで、できたヴィジュアルが一気に世界中に流れるのはいいんですけど、あっという間にみんな「ワン・オブ・ゼム」になっていく。そういう意味では、演劇はなまもので、ますます重要だと思うようになりました。

10歳ぐらいの子は生まれたときからまわりにスマホなどがあって、YouTube再生回数が何回みたいなのカウントで評価するのが日常になっていて、そういうところで時間をかけてクリエイションしようという気になるかな、しんどいやろうなと思います。

吉岡 学術、研究などの分野でも、ちゃんとしたことをやろうとすると、時間と手間がかかる。パソコンとかネットによって、それに要する作業の効率はよくなっているんだけど、本当に重要な、つくり上げる部分は同じです。でも、インターネット・ネイティブの世代の人たちは、そうは思っていない。その時間の長さに耐えられるだけの準備ができていないというか、すぐできるような感じがしてしまう。それから、論文も引用回数とか、数値なんです。まったく同じような状況が、あらゆるところで起こっています。

だけど、僕は自分より若い研究者の人たちと付き合いあって、若者については、そんなに心配していない。たとえば、スマホを1週間使わせないみたいな実験がある。最初は「ええーっ」とか言って禁断症状が出るんだけど、若い人は新しい状況にすぐに慣れるんです。むしろ心配なのはおじさん世代です(笑)。「小学生にタブレットを配れ」なんて言っているおじさんが一番ネット中毒で、なおかつ、もう変えにくい。彼らが最も深刻な影響を受けているけど、そのことを自覚していなくて、「子どもが」とか「若者が」とか言っ

ていることも、いまの時代の危機的な兆候だと思うんです。

やなぎ 子どもは新陳代謝がいいですからね。ただ、老婆心ながら心配してしまうこともあります。芸術作品でも本でも、見切っていく速さみたいなものがある。映画でも早送りですぐと観てしまおうとか、重要なところだけダイジェストで観て、だいたい物語はわかったとか。そういう掴みの粗さというのかな、それで数をこなしていくというふうになってきたと思います。

吉岡 要するに、情報なんです。だから、すぐ「ネタバレ」とか言うでしょう？ そんなこと言ったら、古典なんてみんなネタバレじゃないか(笑)。結末はわかっているわけですから。

やなぎ そうなんですよ。

3Dプリンターと地方の芸術祭

やなぎ 私は演劇を10年ぐらいやってきて、美術を休んでいる時間が長かったんです。それで、ここ何年間、久しぶりに写真作品とか、彫刻を——私は彫刻家ではないのでデザインですけど——やろうとしたら、だいぶ様相が変わっていたのでびっくりしました。

吉岡 どういうふうに変っていたのですか。

やなぎ たとえば、立体作品だったら、3Dプリンターという大発明があって、これが大きな資本と結びついている。有名な彫刻家の作品をパブリック彫刻として発注すると、あだにギャラリーが入っていて、その作品を作家がつくるのではなくて、工場に3Dデータの発注をかける。それを受ける工場が世界中にあるんです。発注は中国の新興都市が圧倒的に多い。

だから、ギャラリーの仕事は、まず作家をブランド化することです。作家が有名になったら、1つのブランドとして作品のバージョン違いを工場に発注する。そこでは、送られてきたデータをもとに3Dプリンターで作る。5メートルぐらいの巨大なフォルムの彫刻が全部漢字できていて、ステンレスを3Dのレーザーカッターで抜いてある。それが、空港とかショッピングセンターに、ものすごい金額で納入されています。もちろんそういう作家はごく一部ですけど、くらくとするようなことになっている(笑)。工場に発注した自分の作品が世界中に散らばる完全なグローバル資本主義の世界で、世界中を飛行機で回って作品チェックして、ほとんどつくっている暇はないけど、経済的な保障はされます。

片や、地方の芸術祭などもすごく盛んです。それもちょっと飽和状態ですけど、地方の歴史や場所に深く入って行って、現地制作で地元の人たちと一緒に1年間かけてゆっくりとやるという流れもあります。ただ

し、やりがいがあっても、ある意味、行政にとったら非正規の町おこし要員みたいなもので、作家自身はなかなか食べられない。両方やれたらいいなみたいにうっすら思っている人は多い(笑)。

吉岡 理想はそうかもしれないけど、実際は無理じゃないですか。

やなぎ 無理ですね(笑)。美術に関して言うと、私はすごく恵まれていました。私のリプレゼンターが海外に作品を売れる人で、30代後半から10年間は作品を売ることによって食べられた。海外でもいくつかギャラリーと契約していました。なるほど、欧米の現代美術はこういう人たちが回しているんやなと思いました。

要するに、舞台と違って、大衆に支えてもらう必要はないんです。ごく一部の知的ゲームを好むお金持ちの人たちに支えられている。そういう意味では、楽と言えば楽なんです。いいギャラリーがついたら、作家がこまごまとしたことを頑張らなくても、作品をちゃんとつくってれば販売してくれる。少ない人数で経済的にも回っていく。だけど、自分のなかでそれに対してずっと違和感がありました。でも、まさか野外劇という一番対極なところへ行くととは……(笑)。

結局、美術、芸術は、資本主義ともものすごく親和性が高い面と、それをまったく外していける面がある。だからおもしろい分野ではあります。

上がりのない双六

やなぎ 「贈与」という考え方がありますね。野外劇をやるときに、この考え方に救われたことが何度もあります。お互いに贈与し合う。私も全力を尽くすし、その場所の人たちも助けてくれる。利益とか損得の問題ではなくて、お互いに純粹で、幸せな贈与関係が起こるときが、ときどきあるんです。そういうのは、作家にとっては、制作を続けていく1つの心の支えになります。

吉岡 90年代からこっち、いまの世界は、あらゆる面でグローバル資本主義がどんどん浸透して行って、美術でも、みんなそっちを目指す方向に吸いつけられている感じで、学術研究もそうなんですよ。

それで失われていくものは共同体だと思うんです。狭い意味の共同体である村落だけではなくて、家族から国家に至るまで、いろんなレベルの共同体があります。その共同体は、贈与によって成り立っているところがある。無償のやり取りですね。それが何らかの仕方では回復されない限り、未来がない感じがします。

大学も、同じような力にさらされています。今朝、ニュースを見ていたら、わが国の総理大臣が「稼げる大学」(笑)と言っていて、すごいなと思った。確かに

そういう方向に向かっているけれど、そんな剥き出しな言葉はだれも使わなかった(笑)。やなぎ そうですね。私は、もう大学は辞めてしまって、いまは非常勤ですけど、長編文学を読んでそこから作品を作る授業をしています。長編文学って、作者も書いていて途中で停滞しているみたいなのがありますね。演劇も、台詞が多い芝居なんかは、どこに向かっているのかよくわからないときがありますが、そういう時間に伴走するのは、いまの時代、ものすごく贅沢なことかもしれないな

と思います。一遍上人も遊行はされましたけれど、どこを目指すわけでもなかった。上がりがある^{すごろく}ではなくて、場所場所で交ざり合いながら行くというのは、私はいいと思います。

吉岡 芝居でも小説でも、尺や長さがあり、結末やエンディングがある。でも、エンディングはそれで終わりではないというのは、そうだなと思います。論文でも結論だけが大事ではないという感じがするんです。でも、いまみたいにプレゼン重視とかになると……。

やなぎ そうなんです。ネット配信とかね。

吉岡 そうそう、ネット配信では、人文系でも15分、30分で何かを伝えることを要求されるけど、理系の人たちなんて5分か10分で結論を出して、わかりやすいように工夫しなければならない。

やなぎ 美術でもプレゼン重視という傾向があります。あれもけっこう影響されていると思います。

吉岡 大学でもプレゼンの授業をやるでしょう？

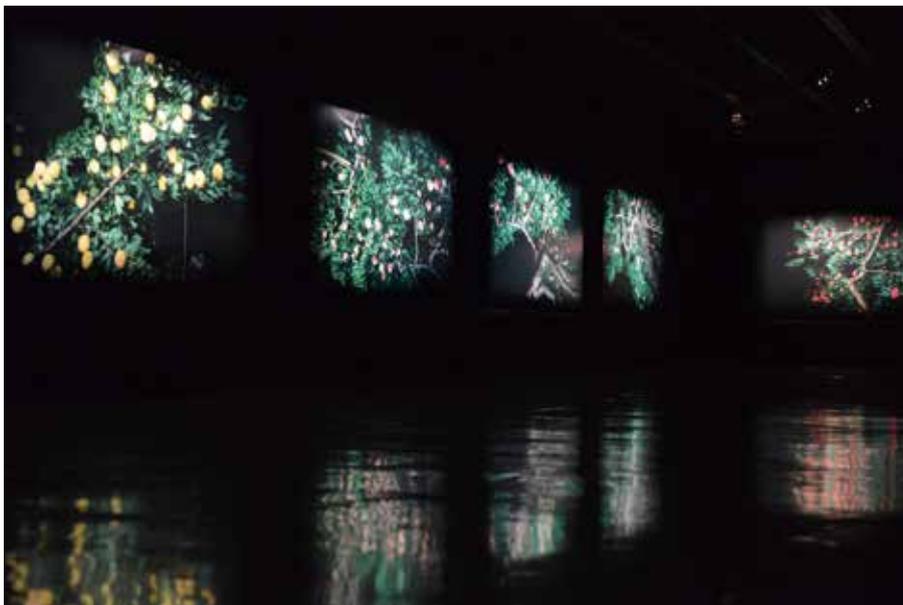
やなぎ ありますね。伝えることがすべてみたいになってくると、映画で90分とか120分が配信の限界というのと同じで、そういうふうに時間を切らないといけなわけです。演劇も、お客さんが座っていられる限界が2時間とか、インターバルを入れるとか、そういうのがあります。一晩やっているとまずい。

吉岡 (笑) 一晩やりたいですか？

やなぎ うーん、べつにやりたくはないですが、たまにそういうのがあってもいいですね。一晩というのがあると、私たちが慣れている時間が、決してスタンダードではないということが思い出される。

吉岡 昔の興業は、1日中やっています。途中で御飯を食べたり、寝たりしながら。

やなぎ 大衆演劇は長いんです。だいたい4時間。宝



「女神と男神が桃の木の下で別れる」の展示 神奈川県民ホール 2019年

塚歌劇も4時間近くある。あいだに35分間のインターバルがあって、御飯を食べたりもします。しかもそれでロングランですから、プロフェッショナルですよ。毎日同じことがちゃんとできるのは素晴らしい。私はいま台湾の大衆劇をやっていますが、けっこうそれに近いものがあるって、大衆劇の俳優さんやスタッフに対してすごくリスペクトがあります。

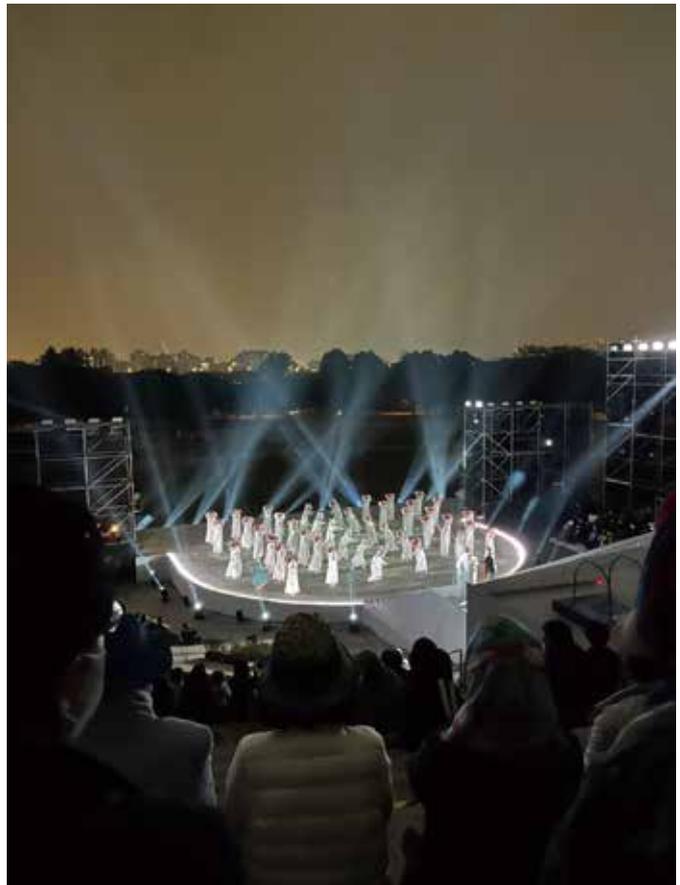
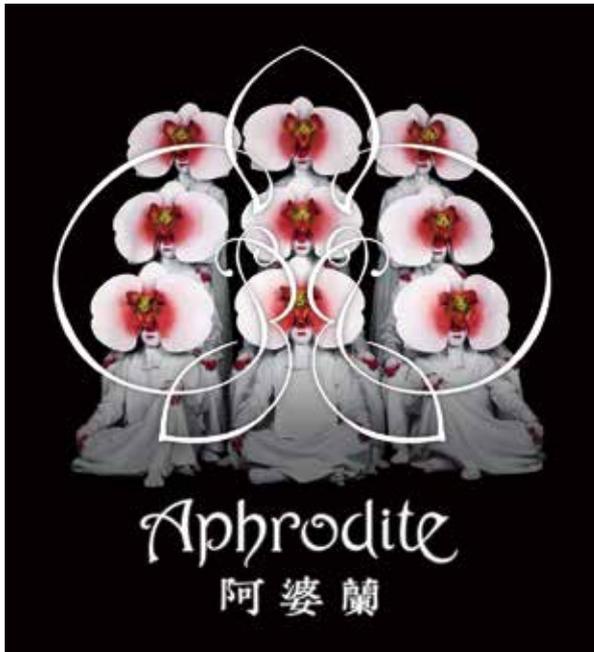
私は演劇をやり始めてまだ11年ぐらしか経っていないんですが、違うフィールドに行っておもしろかった。公私ともに大変なことになりましたけどね(笑)。「演劇は大変なことになるから絶対にやったらあかんわ」「自主公演とかやると身代を潰す」と舞台の人が言っていました。本当にそのとおりになっていました(笑)。

台湾オペラと桃の撮影

吉岡 これからの計画は？

やなぎ いまは台湾の大衆歌劇を作・演出しています。主催は台湾政府なので、舞台はすごく大きいんです。本当だったら去年(2020年)の5月に公演をやっているはずだったんですけど、新型コロナのためにもう1年半も延びています。でも、よく中止にならずにここまでねばっていると思います。

公演は今年の12月の予定なのですが、残念ながら、いまは台湾に行くビザの発給が一切止まっているので、だれも行けません。なので、日本チームでテクニカル・リハーサルをやっています。台日合作ですから、台湾にも同じチームができています。台湾の舞台監督と日本の舞台監督、向こうの照明さんとこっちの照明さんなどがリモートでコミュニケーションを取りながらや



日台合作の台湾オペラ『Aphrodite～阿婆蘭～』は2021年12月25日、台湾の高雄市、衛武宮国家芸術文化センターにて上演された。左上は広報イメージ(提供:衛武宮国家芸術文化センター, 2021)。左下は野外劇場で演出するやなぎみわさん。右は公演の様子。

る。テクニカル・リハーサルの映像を台湾に送って、どこまで向こうで再現できるかを見てもらうとか。それをこの1、2年やっています。

最後は現場での作劇になりますが、日本チームが行けないかもしれない。何とか初演をちゃんといいものにして、再演ができるようにしたいですね。

それをしながら、毎夏、東北の果樹園に行って、桃の撮影をしているんです(「女神と男神が桃の木の下で別れる」)。もう6年ぐらいやったのですが、いまあまりにも新型コロナが感染拡大していて、今年初めて行けなくて残念でした。

真夜中の、何の音もしない果樹園。街灯などないので、真っ暗闇なんです。強いLEDの懐中電灯で照らしたところだけ、1～2分間、シャッターを開けて撮る。カメラも8×10というアナログな方法です。来年からまた再開したいと思っています。

吉岡 やなぎさんの台湾オペラはどんな内容ですか。
やなぎ 私の台湾オペラは『Aphrodite～阿婆蘭～』⁵⁾というタイトルなんです。日本でも大人気の「胡蝶蘭」がありますね。冠婚葬祭や開店祝いに、3本立て、

4本立ての白い胡蝶蘭が並ぶ。胡蝶蘭の学名はファレノプシス・アフロディーテといって、ファレノプシスはギリシャ語で「ちょうちょ」のことです。アフロディーテは女神の名前で、すごく可愛い、きれいな名前がついている、真っ白の蘭です。私は蘭が大好きで、蘭について語り出したら長いです(笑)。胡蝶蘭は花が大きくて、10輪とか20輪とか並んでいます、あれは全部クローンなんです。原種は小っちゃい白い蘭だったのが、プラント・ハンターに根こそぎ持っていかれて、もっと花を白く、大きく、とものすごく改良されました。さらにDNAで増殖させて、苗を輸出する。土が要らないので検疫がないから輸出が楽で、台湾の国家ビジネスになっています。

私の台湾オペラは、何千万株と大量につくられた胡蝶蘭のクローンたちと、絶滅しかかっている野生蘭の戦いの話です。

最後、何十人も同じクローンの蘭が出てきて、原生蘭たちと対峙する。オペラですから歌でやりますけど。
吉岡 それはおもしろそうだけど、『アフロディーテ』というタイトルとか、蘭のクローンと原種の戦いって、

どんなところが大衆に向いているんでしょうか。

やなぎ そこはスターが歌えたいじょうぶです(笑)。台湾オペラというのは、宝塚歌劇を想像してもらったらいいです。男役スターが主役です。うちの家は代々宝塚ファンなんですよ。

吉岡 最初の演劇体験は宝塚歌劇だったとか。

やなぎ そうなんです。うちの母も、その母も、ずっと宝塚ファンなんです。私は幼いときからずっと宝塚を観せられていました。宝塚に対して愛憎半ばするところがあって、もともと宝塚歌劇をつくったのは小林一三⁶⁾さんで、「清く正しく美しく」という、歪んだ少女幻想みたいなものがある、演出も脚本も男性、私は苦手だったんです。「すみれコード」といって、男性と付き合ってはいけないとか、結婚するなら退団とか、あるじゃないですか。それから、全員が全力で、ちょっと甲子園みたいな感じがします。

吉岡 そうですね。僕も宝塚は何回か観たことがありますが、入り込めないところはある(笑)。それは、おそらくいまやなぎさんが言った少女幻想のところなんじゃないかな。

やなぎ 台湾オペラはそういうのは一切なくて、座長は男役の女性で、だいたい60代から70代。私が組んでいる劇団の座長には娘さんがいて、それも男役で、女系の一座なんです。座長の夫は楽隊を仕切っていたり、制作をやっている裏方の方が多い。親戚などと一緒にやっているので、家族経営に近いんです。

吉岡 台湾オペラはいつごろ始まったのですか。

やなぎ 日帝時代以前からあったと思います。テキストとしては、宝塚歌劇と京劇を混ぜたような感じです。中国には「越劇」という女性だけの劇がありますし、音楽的には、台湾の少数民族の音楽が混ざっていて、歌は中国語ではなくて、台湾語で歌うのです。私が日本語で脚本を書いたのを中国語に訳して、さらに台湾語に直しています。

台湾はいろいろなものが自然に混ざり合っている。長く続いた権力がなくて、そして、これからはそれはないだろうというのが台湾のアイデンティティですから。

最初に蘭のリサーチに行ったのが2016年ですから、5年ぐらいかかっています。延期延期で大変ですけど、コロナの時代、植物をテーマにするのは、精神的には楽でした。

最期の正念場

吉岡 さて、仕事や生活に追われているあいだは忘れていますが、誰にとってもいずれは人生の終わりという正念場がやって来ます。「自分はこんな人間だったのか！」ということに直面してジタバタする、滑稽で悲

劇的な経験でもあると思うんです。しかしこれも最近「終活」なんていうキレイな言葉で覆い隠して、正念場に直面するのを避けようとしているように思うのですが……。

やなぎ 死を前にしたとき、どんな自我になるのか。脳を含め身体の変化に大いに影響されます。

せん妄や認知症による人格の変化など、辛い状態になる可能性も大いにあります。結局、正念場というのは、いろいろ捨て去り、これ以上なくすものがないというときに来るのかもしれないですね。生のままの状態の間は、恐ろしくもあります。だから病老死を特別な場所に囲い込んで目隠しをするのかもしれない。しかし、この高齢化した多死社会において、病老死は暮らしの中にあるのが自然、ゆるやかに日常に存在するように社会が変わっていかばと思います。死を前にした正念場の人と一対一で向き合うのは大変ですから、みんなが受け入れていくということです。いまだに終末医療施設や霊柩車を忌避したりするのが不思議です。

野外劇の直後に父を送ったときは「金の宮型霊柩車で、出棺のクラクションは派手に」とお願いしました。最近では宮型霊柩車が敬遠され、葬儀屋さんは探すのに苦労され、結局、金ではなく白木の宮型になりましたけど。死者は最期の正念場を乗り切った人なのだから、千秋楽のように送る。病老死は、いまま芸術芸能の中に内包されたものと最近、身をもって感じます。(2021年8月27日、京都大学こころの未来研究センターにて。p2、p3撮影：坂井保夫)

注

- 1) 唐十郎(1940-) 劇作家・俳優。1960年代後半から「状況劇場」を旗上げし神社や公園などで巨大な紅 TENT を張ってアングラ劇を行い人気を博した。
- 2) 時宗 鎌倉時代末期に興った浄土教の一宗派で、江戸時代までは「時衆」と書いた。一遍が開祖とされるが、一遍には開宗の意図はなかった。
- 3) 一遍(1239-1289) 全国を遊行して南無阿弥陀仏を唱えることを説き、踊り念仏と賦算で民衆を極楽浄土へと導いた。その活動は『一遍聖絵』に描かれている。
- 4) 中上健次(1946-1992) 和歌山県新宮市出身の作家。生まれ育った「路地」を舞台にした多くの作品を作り上げた。『日輪の翼』は現在、河出文庫で刊行中。
- 5) 『Aphrodite～阿婆蘭～』 やなぎみわ氏脚本・演出・美術。「阿婆蘭」は胡蝶蘭の台湾での名称。コンテンポラリーアートフェス「Taiwan NOW」のフィナーレとして2021年12月25日に上演され、YouTubeでも配信された。
- 6) 小林一三(1873-1957) 阪急電鉄をはじめとする阪急東宝グループ(現・阪急阪神東宝グループ)の創業者で宝塚歌劇の生みの親。

正念場——決定的に受け身になる幸せ

加藤有希子 (埼玉大学基盤教育研究センター准教授)
KATO Yukiko



1976年神奈川県横浜市生まれ。1999年早稲田大学第一文学部美術史専修卒業。2001年慶應義塾大学大学院哲学専攻美学美術史分野修士課程修了。2004年よりフルブライト奨学金にてデューク大学美術史視覚文化学科博士課程入学。2007年慶應義塾大学大学院美学美術史専攻博士課程単位取得満期退学。2010年デューク大学美術史視覚文化学科博士課程(Ph.D.)修了。2011年度立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー。2012年より埼玉大学基盤教育研究センター准教授(現職)、2020年より放送大学埼玉学習センター客員准教授兼務。立命館大学生存学研究所客員研究員、慶應義塾大学文学部非常勤講師、うらわ美術館協議会委員などを務める。専門は美術史、表象文化論、美学。著書に『新印象派のプラグマティズム——労働・衛生・医療』(三元社)、『色彩からみる近代美術——ゲーテより現代へ』(共著、三元社)、『カラーセラピーと高度消費社会の信仰——ニューエイジ、スピリチュアル、自己啓発とは何か?』(サンガ)、『ゆらぎ——ブリジット・ライリーの絵画』(共著、DIC川村記念美術館)、*Globalizing Impressionism: Reception, Translation, Transnationalism*, Yale University Press(共著)、『クラウドジャーニー』(水声社)ほか。

私の正念場

たいへん言いにくいことではあるし、実際、この11年間、夫以外には誰にも話したことの無いことだが、私は2010年の3月、33歳のときに自宅で首を吊った。そして首を吊った瞬間、カーテンレールが折れて、一命をとりとめた。小さいころ、足に針が刺さり、折れた針が心臓に刺さるのではないかという危険性のなか緊急手術したことや、40代になり乳がんを患って手術したこともあるが、後にも先にも、私にとっては、このカーテンレールが折れた瞬間が、本当の「正念場」だったことに間違いはないだろう。

2009年から免疫の病気である膠原病を患い、博士論文も書けなくなり、恋人もおらず、就職先もなく、収入もなく、ステロイド剤で顔がパンパンに腫れて姿も醜くなり、当時の自分としては考えうるかぎり一切の希望が断たれた中での自殺未遂だった。遺書は書かなかったし、書けなかった。本当にどうしようもなく死に追いやられる人間は、遺書などという積極的なものは書けないことを知った。遺書のある自殺は、自分で死を選んでするという点で、残力があるとも言える。遺書を書く気力の残っている人は、まだ生きてほうがいい。

こんなことは一生誰にも言わないつもりだったが、今回、『こころの未来』誌より「正念場」執筆の仕事をもたらったとき、私の人生の本当の「正念場」と言えば、どう振り返ってもこれしかなく、避けて通れない人

生の節目であったことを自覚した。「正念場」という言葉の語源として、浄瑠璃や歌舞伎などで、人物がその本来のあり方(性根)を發揮するクリティカル/決定的な場面という意味があるそうだが、私にとってあのカーテンレールが折れた瞬間は、私の人生の真の性根が顕われ出した瞬間であっただろう。

この話は今でも、私にとって大っぴらに話したい内容のものではないが、しかし、これを聞いて、今、いろいろな労苦に直面している人たちの中で、勇気づけられる人もいるかもしれないと思い、改めてそれが何であったのかを考えてみようと思った。

あれから10年後に

2010年3月にカーテンレールが折れた日、私は死ぬことにも諦めがついて、深く暗い湖の底に手をつけて、もう一度浮き上がろうとしていた。自殺未遂を何度も繰り返すがいるが、私はそういう気は起きなかった。その当時は、生きたいとか、生き延びたいとかそんなことは一切考える余裕がなかったが、カーテンレールが折れた瞬間、私は死ぬ運命にはないのだということが得心され、ついに腹をくくって息をしようと消去法の決意をした。

そこから膠原病のステロイド剤が徐々に減り、体調もわずかながら上向き、毎日ほんの少しずつ博士論文を書き続けて、2010年12月にはアメリカで学位を取った。幸運なことに2011年にはすぐに立命館大学のポストクとなり、翌2012年には埼玉大学の

正規の教員として就職した。私としてはその間も苦労は多かったが、傍から見たらとんとん拍子の回復で、ほとんどの人は私の病気のこと自体も知らなかったため、私が何の苦労もなく、大学教員に上り詰めたと思った人も多かっただろう。

その後、順調な職業生活を送っていたが、私は2020年3月、43歳のとき、コロナ禍の最中に乳がんの宣告を受けた。命に別状はない初期のものであったが、過去の膠原病の病歴から放射線治療は受けられず、右乳房を全摘することになった。このとき、私は10年ぶりに人生の困難に直面し、久しぶりにあのカーテンレールが折れたときのことを思い出したのだ。

私にとって、あのカーテンレールが折れたときのことは、長らく人生の謎だった。そもそもなぜ自分があんな窮地に陥らねばならなかったのか、そしてなぜ命を永らえることが出来たのか。科学的な世界では愚問としか言いようがないが、そう問いかげざるを得なかった。私は常々、自分は科学一辺倒の世界には生きていないと思ってきた。人生が順調なときにはほとんど考えることがなかったが、10年前の辛苦の上に、コロナ禍で乳がん^{きん}に直面して、私は改めて人生における苦悩の意味を考えるようになった。

2020年3月27日に、数々のがん検査を経て、命に別条のないステージ1の乳がんであると診断された私は、入院中にこれを小説にしようと思いついた。なぜならそれは「なぜ自分があんな窮地に陥らねばならなかったのか」「なぜ命を永らえることが出来たのか」という愚問に答える唯一の方法に思えたからだ。物語は、何もないうちに意味を付与するものだ。物語を書けば、私の「なぜ」という問いに答えられるかもしれない。そして約1年間の苦闘の末に2021年7月、私は私小説とも呼べる『クラウドジャーニー』（水声社、図1）を上

梓した。

この物語で、私は膠原病と乳がん^{きん}に苦しみ運命に翻弄される主人公を描いたが、あのカーテンレールのことは書くことが出来なかった。本当のトラウマというのは、人に言うことはできない。しかしこの小説を書こうと決意したとき、私の核にあったのは、あのカーテンレールが折れた瞬間のことだった。私は「正念場」に勝った主人公を描きかかった。「私は生き延びたんだ」というその「恩寵」——吉岡洋先生が『クラウドジャーニー』の解説で使われている言葉だが——を物語の核にしようと思った。それは読者に、そして誰より自分自身に、人生に対するあの「確信」を味わわせたかったからだ。「生きていてもいい」「生きるべきだ」と思えること、それは単なるハッピーエンドではない。むしろ泥沼の中で「正念場」の勝負をすること、勝つか負けるか分からない闘いに挑まざるをえないこと、そのことの煌めきを描きたいと思った。

決定的に受け身になるとき

「正念場」とは、進退きわまって本気を出さざるを得ない場面のことであるが、小説『クラウドジャーニー』では、がんの診断にすべてを委ねざるをえない女性主人公を描いた。高い教育を受けた大学の准教授であるが、病魔に際して、何一つ自発的には決められない。客観的に見れば、いやになるほど受け身の物語だ。度重なるがんの検査では、がんがどこにあるのか、どの程度なのか、どんな治療を選ぶべきか、自分で決められることなどほとんど一つもない。そしてコロナ禍のエイプリルフールに運命の手術に臨む。物語のなかでは、ここが正念場となる。ただ私の



図1 加藤有希子『クラウドジャーニー』（水声社 2021年7月）書影

なかでは、それは2010年3月のカーテンレールが折れたときのことを下敷きにしたものだった。

首をくくったときもまた、私は決定的に受け身だった。病状が重く、人生を前にも後ろにも進めることができなかった。そして私は追い込まれるように、全存在を委ねた。そのときは、助かることなど一切考えていなかったし、そんな俯瞰的な視点は持つことができなかった。けれどカーテンレールが折れたとき、私は初めて自分の人生を信じてきたような気がした。

2021年6月末に小説を入稿した直後、私は東京・竹芝のダイアログ・ミュージアム「対話の森」で、「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」という完全な暗闇を体験するアクティビティに参加した（図2）。視覚障害者のニノさんのアテンドにより、一切光の入らない本当の真っ暗闇で、ゲームをしたり、声を掛け合って移動したり、畳の匂いを嗅いだりする。お互い、ニックネームを覚え、呼びかけ合って、杖を使って行動する。一切の視覚情報が断たれると、俯瞰的な視点がまったくなくなる。もう目

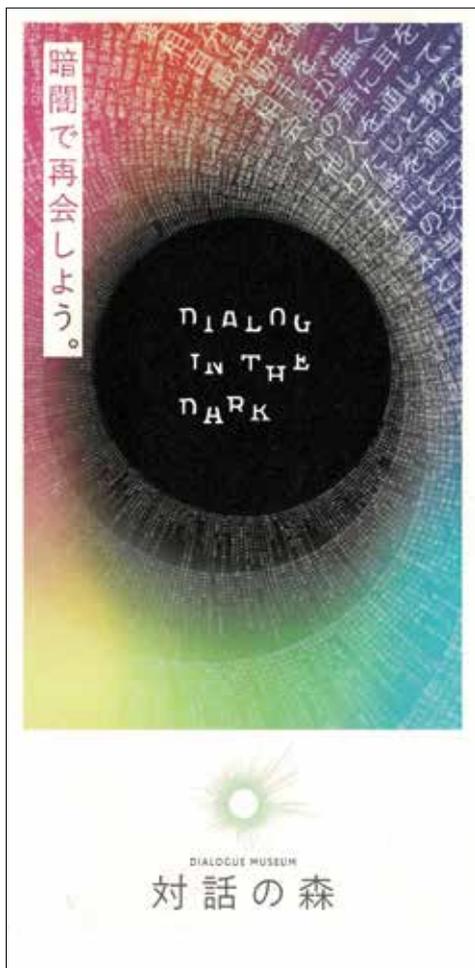


図2 「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」パンフレット(2021年7月、アトレ竹芝シアターで入手)

の前のことを触れられる範囲で、言われるがままにやるしかない。自分がうまくできたのか、できなかったのか、そのことすらまったく分からない。

「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」は「正念場」の縮図だ。人の一生は本来、前後不覚のものだ。そもそもどこから来て、どこへ行くのか、なぜこの世が存在するのかすら分からない。そうした中で、わずかな蠟燭の光を頼りに日々、生きていく。それが人生だとしたら、「正念場」は何らかの事情でその光が消え、自分が一人、ただ自分の勘だけを頼りに勝負に挑まなければならないことに似ている。そして完全な暗闇の中では、自分から「わたしはゆきこです」と発話しない限り、他人には認知してもらえない。それが生き残る唯一のすべなのだ。思えば、「正念場」というのは、「自分は自分です」と暗闇の

中で声を上げて、助けを求めることなのではないのか。

人は「正念場」に立たされたとき、大きなうねりの中に巻き込まれ——それが極端な孤独であっても、逆に衆人の注目を一身に浴びるときでも——状況に委ねるしかない。決定的に受け身になること、その中で自分はここにいるんだと叫ぶこと、これが「正念場」ではないだろうか。どんな人でも、一番の勝負のときは、決定的に受け身だ。与えられた崖っぷちの条件のなかで、自分の存在を叫ぶしかない。私は首をくくったとき、自分にはもうそれしか選択肢がないと思っていた。死しか選択肢がないと思っていた。でも諦めてすべてを委ねたとき——つまり自分の存在を神に対して試したとき（私は神を試してはならないという禁を犯した）——私は「わたしはゆきこです」と言ったのだと

思う。そのことによって、私の人生は初めて顕現し、生き延びることができたのかもしれない。

自分で選択することは幸せか？

アルベール・カミュは『シーシュポスの神話』(1942)の中で、「真に重大な哲学上の問題はひとつしかない。自殺ということだ。人生が生きるに値するか否かを判断する、これが哲学の根本問題に答えることなのである」(新潮文庫, 2018, 12頁)と述べている。私はこの言葉に多少の違和感を覚える。

私の大学の学部時代に、致死量の睡眠薬を常に持ち歩き、それを自慢している男の子がいた。「自分で自発的に死ぬ選択肢があると、自由を獲得できる」と彼は睡眠薬の小瓶をみなに見せびらかしていた。私は正直、それは滑稽だと思った。

死というのは、本当に自分で選択できるのだろうか。そして自殺とは、カミュや学部時代の知人のように、自分で人生の価値を上から判断する高等遊民の決断なのだろうか。少なくとも私の場合は違った。就職氷河期の、孤独な、難病の大学院生が、行き場を失い追い詰められた結果の場所だ。端的に言えば、自殺にも時代精神があるだろう。カミュや私の知人の希死念慮は、ある意味では、20世紀後半の恵まれた時代の戯言とも言える。

今、グローバリゼーションによる人間性のはく奪に特徴づけられた2000年代も本番になってきて、極端な貧富の差、能力主義、労働の価値の低下、貧困、自然災害、コロナによる失業、マスメディアの跋扈、SNSの相互監視、テロリズムなどにより、私たちは一層追い詰められている。今、自ら死に追いやられる人は、行き場を失って、どうしようもなくなって自死を選ぶのではないか。かつての高等遊民が「人生が生きるに値するかどうかを判断する」などといった絵空事はなりをひそめ、私たちの時代自体が、まさしく切羽詰まった「正念場」を迎えているのではないか。

しかしこの「正念場」は、かつての高等遊民の自殺願望を支えたものから、実はもたらされていると言えるかもしれない。それは「自分で選択することは幸せである」というディスクールだ。「自分で運命も死も選択したい」「自分の人生、自分で主導権を握りたい」こういう言葉は、今、あまりに多くの場面で聞かれるようになった。

これが明確なかたちで思想界に現れたのは、アメリカの思想家フィニアス・クインビー(1802-1866)のニューソート(New Thought)からだ。彼は若いとき、病気にかかっていたが、「病気というものが誤った信念の中以外には何ら実在してはいないのだ、ということを確認した」「病気が

という思い込み自体が実は病気なのだ」と考えた。自分さうまく御すれば、すべてが解決するというこの考えは、20世紀の後半、先進国で醸成され、そして21世紀に入り、病的なまでにはびこっている。

「誰のものでもない、自分自身の人生なのだ。自分のやりたいように生きることだ」、「弱い心が病気を呼ぶ」(ウェイン・W・ダイアー『自分のための人生』, 1976) といった考えは、2020年代になった今でも、弱まるどころか強まっており、教育現場、自己啓発、コーチング、コンサルティング、マーケティング、カウンセリング、あらゆる場面で沁みついている。結局は20世紀後半から、私たちは自分で自分の人生を選べると主張し、それを実践し、そしてかなりの局面でうまくはいかず、追い詰められてきたとも言える。自己肯定は裏を返せば自己懲罰でもある。

そして2020年からの世界的なコロナ禍で、このミーイズム(自己中心主義)は極限を迎えている。そのことをいち早く察知したのは、哲学者のマイケル・サンデルだった。『実力も運のうち——能力主義は正義か?』(The Tyranny of Merit: What's Become of the Common Good, 2020, 邦訳は早川書房, 2021) の中で彼は、「自分の運命は自分の手中にある」「われわれは環境の犠牲者ではなく運命の支配者であり、努力、才能、夢があるかぎり、自由に出世できる」という考えは、かつてないほど私たちが傲慢にし、結果的にそこからあふれた人々からの怨嗟によって、イギリスのEU離脱やトランプ人気などの社会の混沌がもたらされていると指摘した。そして所得の中央値が40年間同じアメリカで——日本だけではなく——極端な貧富の差を経験している私たちは、その成功も失敗も、偶然によりもたらされたことを知り、もっと謙虚になるべきだと結論している。

この極端に自己のあり方に責任をなすりつける世の中で——日本でも

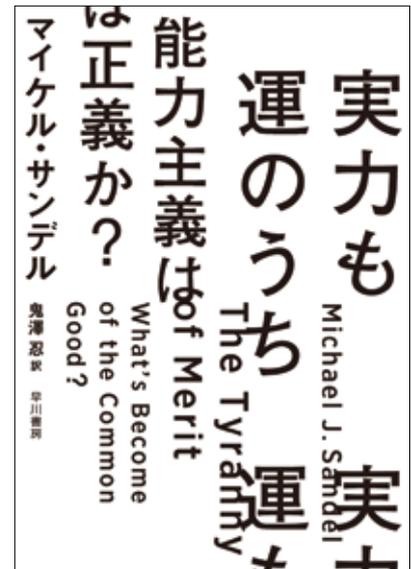
自助、自己責任、自業自得という言葉があまりに頻繁に使われるようになってきた——最近になって占いや生活の細部にわたるまで指示を加えるApple Watchなど、他人に判断を委ねるものが流行りはじめているのは、示唆的だ。私も『クラウドジャーニー』の中で、予言や縁起に翻弄される主人公を描いた。今の世の中、みんな本当は、他人に任せたいと思っているのではないか。そのくらい自分ですべてを背負うことはつらいことだ。

よくよく考えれば、自分で選択できることなどほとんどない。生まれた場所、国籍、民族、両親、生まれた家の経済状況、遺伝的才能、社会情勢、生まれた時代、地球の未来、人類の未来……あまりに多くの決定的なことが、自分一人の力では決められないということを今一度、思い起こさなければならない。20世紀後半ではある種の知的男性のレトリックだった「人生は生きるに値するか」という戯れの思考は、今では過去のものになった。今はみんな生きるだけで精いっぱいなのだ。それだけ時代は厳しくなり、そして私たちの時代が「正念場」を迎えている。

人生に正念場があるということ ——幸福至上主義を打破するために

カーテンレールが折れなければ、私は自分の運命を自覚することもなかった。いや、カーテンレールが折れなくても、私は自死を成し遂げて、運命を自覚したかもしれない。つまりどちらに転んでも、それが運命としか言えないような決定的な場面に遭遇すること、それが「正念場」を生きるということだ。そして今、世の中もまた「正念場」を迎えている。

私は幸運だったと思う。カーテンレールが折れたこと、それがなければ今、この文章も書いていないし、小説だって出せなかった。そもそも私は大学教員としての職業経験をする



マイケル・サンデル、鬼澤忍訳『実力も運のうち——能力主義は正義か?』(早川書房, 2021年)

ことなく人生の幕を下ろしたかもしれないのだ。これは吉岡先生が『クラウドジャーニー』の解説で書いてくださったように、「恩寵」であった。

ただ、この「正念場」のエッセイを書いてみて、私がそれと同じくらい貴重だと思うのは、私があのとき、一切を捨てる経験をしたこと、一切を委ねる経験をしたことだ。人生にはコントロールしがたいことがあること、それゆえの神秘があること、それを経験したこともまた幸運であった。

それはうまくいく幸せ、幸福至上主義の幸せではない。みんな幸せになりたいと思っている。けれどそれはいつもうまくいくとは限らない。自殺が完遂されてしまうこと、不治の病にかかること、事故で死ぬこと、経済的に失敗すること、天災や人災の犠牲になること、いろいろな可能性がある。そうした中で、すべてを委ねること、それが「正念場」に立つということだろう。それは幸福でなければならないといった種類の幸福ではなく、すべてを包みこむ幸せだ。「正念場」に立つとは、人生の勝負に際して、そうしたすべての可能性を引き受け、人生に導き入れることに他ならない。

極私的正念場について

天野太郎 (インディペンデント・キュレーター)

AMANO Taro



撮影：池田宏

美術評論家連盟所属。北海道立近代美術館勤務を経て、1987年の開設準備室より横浜美術館で国内外での数々の展覧会企画に携わる。横浜市民ギャラリーあざみ野主席学芸員、札幌国際芸術祭2020総括ディレクターなどを務め、現在は多摩美術大学美術学部芸術学科非常勤講師、インディペンデント・キュレーター。2022年4月より東京オペラシティアートギャラリーのチーフ・キュレーター就任予定。担当した主な展覧会に「ニューヨーク・ニューアート チェースマンハッタン銀行コレクション展」(1989年)、「戦後日本の前衛美術」展(1994年、横浜美術館)、「森村泰昌展 美に至る病一女優になった私」(1996年、横浜美術館)、「ルイズ・ブルジョワ」展(1997年、横浜美術館)、「奈良美智 I DON'T MIND, IF YOU FORGET ME」展(2001年、横浜美術館)、「ノンセクト・ラディカル 現代の写真III」(2004年、横浜美術館)、「横浜トリエンナーレ」(2005)キュレーター、「アイドル!」(2006年)、「金氏徹平：溶け出す都市、空白の森」展(2009年、横浜美術館)、「横浜トリエンナーレ」キュレトリアル・ヘッド(2011年、2014年、横浜美術館)など。

困った! あるいは「正念場」とほど遠い人生

2021年の4月から長年勤めた美術館、市民ギャラリーを退職し、フリーの学芸員、インディペンデント・キュレーターと称して個人商店を開くことになった。個人商店と言っても、店どころか事務所も自宅という有様で、営業をかけるわけにもいかず、ひたすら仕事の注文を待つ身となった。この原稿の依頼=注文もその1つで、フリーになってみると、こうして声をかけていただくのが身に染みてありがたく、ふたつ返事で引き受けることにした。

とは言え、容易に想像されたことだが、お題をいただいて何かを書く、それもこれまでの生業の美術とは直接関係なさそうなお題で執筆に取り掛かったことがないので、途端に途方に暮れることになった。

「正念場」という言葉は、決して珍しい言葉ではないものの、思いを巡らせば巡らすほど、自身にとって最も縁遠い言葉の1つであることを知ることになったし、そもそも、六十年数年生きてきて、自らこれは「正念場」だ、と奮起したことなど一度もないことも判明し、「正念場」の1つや2つを乗り越えたこともない、まことに気楽な人生であることを期せずして証明してしまった。

とは言え、それを「正念場」と言うかどうかは別にして、これまで、確かに、前にも後ろにも進めなかったことはなくはなかった。大学を卒業して大学院まで行って学問を極めるなどという進路を試したこともあったが、あっさり試験には落ちるし、

その後の就職もいくつか試しはしたが合格までは至らなかった。さすがに、夜もなかなか寝られない日も続いたが、先に就職をした優秀な同級生(北海道立近代美術館の学芸員)の紹介で受けた美術館に首尾よくというか、おそらく縁故(もう時効?)で職を得ることになった。縁故と推察されるのは、職を得てしばらくすると優秀な同級生との比較が始まり、期待外れの声が少なからず聞こえたからだ。

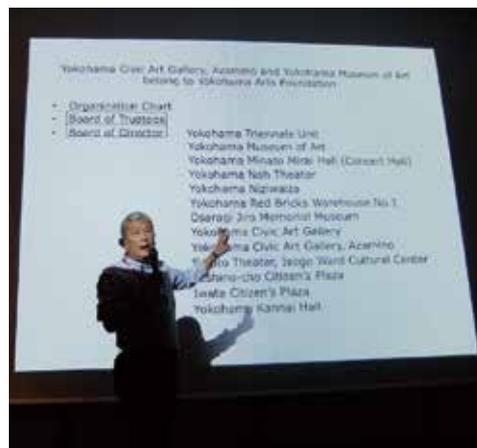
「天野くんは背が高いから、軸の展示のときに矢筈^{やはず}要らずで、なかなか便利」と評されたのはまさにその証拠。それでも、平気だった。そもそも、どうしても美術が好きで、何かなんでも学芸員になりたい、という気がまったくなかったからかもしれない。とにかく何でもよいから前に進めばよかった。

就職できた美術館というのは北海道立近代美術館のことで、いきなり関西からひとつ飛びで最北の地での生活が始まった。そもそも他所者の寄り合い所帯でもある北海道では、関西弁を軽々しくしゃべることが、東北ほど憚られるわけでもなく、仕事より、山登りや初めてのスキーに興じ過ぎて職場ではいかなものかと訝しがられていた。そんなことよりも、食べ物も美味しい、人も親切だし、飲みに出ると必ず午前様が常態化している札幌の生活には何の不満もなかった。おまけに、面倒な親戚付き合いもない、地縁血縁のしがらみがないのもありがたかった。ということで、ここでも「正念場」とは無縁だった。

その後、横浜美術館の開館準備室



長身を生かした照明機器の設置作業



A4 ART MUSEUM(成都、中国)にてシンポジウムの発表(2016年8月29日)



福岡にて美術作品の扱いについてのレクチャー(2016年6月7日)



横浜市民ギャラリーあざみ野での講座(2020年10月22日)



企画した「Identity XII - 崇高のための覚書」(nca | nichido contemporary art)展示作業(2016年6月23日)

へ声を掛けてもらって移ったときも、まだ30歳そこそこでいきなり管理職になってしまったのも幸運(?)としか言いようがない。若さに任せて、深夜まで働き、その後は、同僚と野毛で飲み明かすような生活をし、劇症肝炎で命を失いかねない病気にもなったが、医者「数カ月の入院は覚悟してほしい」の言葉とは裏腹に、健康な入院生活で1カ月もしないうちに数値がみるみる下がり無事退院となったのも、人から見れば「正念場」だったのだろうが、入院生活でさまざまな患者との付き合いを楽しんでいた嫌いもあり、呑気なものだった。

これらは、「正念場」を乗り越えたというよりも、「喉もと過ぎれば熱さも忘れる」の喩えそのものだろう。

ということで、自らの「正念場」を語るというよりも、そもそも正念場には縁遠かったことを証明しようとしているとしか見えない書き出しだが、それ以外に手立てがないのが正直なところだ。

さて「正念場」とは何？

ところで、決して珍しい言葉ではない、と書いたが、一昨年来のコロナ禍では、この「正念場」は、スローガンのように繰り返し政府や自治体、あるいはメディアから連呼され、もう聞き飽きたと言ってもよいくらい使い古されたものとなってしまったように思う。おそらく、「正念場」とはまさに一生の間に一度あるかなにかの大事件であるのだが、これだけ簡単に使われるとありがたみもないだろう。

こうした機会なので、改めて「正念場」という言葉を調べてみた。

そもそも仏教用語であったことなど、まったく知らなかった。というより、原義は、「雑念を払い仏道を思い念ずること、正しい真理を思うこと」という意味だから、今のここ一番の大事な場面、というのは、ず

いふんと飛躍した意味に転じてしまったような気がする。しかし、俗人から言わせると、「大事なことはよく覚えておけ」も、「一番大事な場面だぞ」も、どちらかと言えば、自ら自発的に言い聞かせる（本来はここがまさに肝心なのだろうが）というよりも、第三者から自らの事態を指摘され、ようやく事の次第を理解するのが自然なような気もする。

現代社会の中で発せられる「正念場」（例えば、分科会尾身茂会長「高齢者にワクチン届く6月ごろまでが正念場」2021年4月1日、NHK <<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210401/k10012951441000.html>>）が、既に述べたコロナ禍における第三者から発せられたスローガン化した言葉として流布しているのが何よりの証左だろう。

ただし、本来の「正念場」は、「喉もと過ぎれば熱さも忘れる」ようなものではなく、常に大事なことを念じているかどうか、に係っている言葉なのだから、明らかに現代用語としては、本来の意味を大幅に逸脱しているのではないかと、とも思った。

いずれにしても、他人から、「君の今の事態をまさに正念場と言うのだよ」と示唆されて初めて事態を理解するのが一般的なようにも感じる。そういえば私も、何度かそうした言葉を学校の教師や親から言われたような頼りない記憶がある。自覚がなかったもので、そうした言葉も虚しく浪費されてしまった。まことに申し訳ないといまさらながら思う。

他人からの指摘、あるいは要請として「正念場」を考えると、コロナ禍でのスローガンとして使用されることも頷ける。頷けるが、それはそれで言われるほうからすると大きなお世話、でもある。そもそも本来の意味での「正念場」ではない以上、ここで使われる言葉には言外に「言うこと聞けよ」が含意されているのは見え見えだからだ。というよりも、この場合、つまりコロナ禍における政府や自治体のこれまでの対応の酷

さが図らずも露見してくれたので、ますます「正念場」の言葉の株は下がる一方となった。

「言うことを聞けよ」で思いついたので、きっとあるに違いないと、戦中の「贅沢は敵だ」のようなさまざまなスローガンの中で「正念場」を探してみたが、意外にも見つからなかった。詳しく探せばあったのだろうが、何にしろ頻繁に使った形跡がなかった。ひょっとすると当時の皇国史観の中では、「正念場」の当事者として臣民は埒外であったのかもしれない。これはこれでなぜ使われなかったのか知りたいものである。

また、「正念場」は、必ずしも上位下達で頻繁に使われてきたわけではないのも事実だ。

琉球新報にこんな記事があった。「屈辱の日 真の主権をこの手に 民主主義の正念場だ」2013年4月28日（web版琉球新報）

沖縄や奄美、小笠原が日本から分離された1952年4月28日のサンフランシスコ講和条約発効から、61年がたった。沖縄住民が「4・28＝屈辱の日」として語り継いだ節目を、安倍晋三首相は「わが国の完全な主権回復」の日と再定義し、事実上の祝賀式典を開く。対米従属外交や沖縄の基地過重負担、県民の苦痛を正視しない政府の式典強行に強く抗議する。

式典開催を機に憲法改正など安倍氏が目指す「戦後レジーム（体制）からの脱却」も加速しよう。この国の民主主義や立憲主義の正念場だ。国民一人一人がこのことを銘記すべきだ。

こうして見ると「正念場」とは、突然現れた困難ではなく、長期的に継続した状況が前提になっているように思う。そう思うと、確かに、最近のメディア側がこの「正念場」を使い出したのも、2021年に入り第4波、第5波とコロナ禍の長期化あた



「焼き場に立つ少年」はアメリカ人ジョー・オダネルが1945年に撮影した写真。この写真について調査した吉岡栄二郎『「焼き場に立つ少年」は何処へ——ジョー・オダネル撮影「焼き場に立つ少年」調査報告』（長崎新聞社、2013年）という本も出版されている。

りからのようである。

「正念場」とは、先にも少し触れたが、ずっと続いている事態とどう向き合うのか、という意味が込められているように思った。事態そのものはある意味で変化しないが、向き合う側がそれにどう対処するか、あるいはすべきなのか、が問われているのだろう。しかも、少し頭を捻れば解決するようなものではなく、おそらく継続的に、そして、全人格的な対応が求められるのだろう。これは、理屈では理解できても、自分にとってはもっとも苦手というか、その能力のなさが先に頭を擡げる。

先送りとしての「正念場」

すでに両親も他界し、親戚も少しづつ亡くなり、身近な同世代、あるいは少し上の世代の知り合いもだんだんと鬼籍に入りつつある。子どものころは、両親が亡くなるなどとい

うことを考えただけでも、いわゆる言い難い孤独感に襲われたが、今ではそんな感情もどこかに消えてしまった。どちらかと言えば、孤独を愛するというよりは気の置けない友人とワイワイと過ごすことのほうが向いていることを思えば、こうして周りから知り合いが消えていく事態は、それこそ幼少期に感じた孤独感に苛まれてもいいはずだが、本能的なのか、一種の危機管理なのか、いちいち考えないようにしている。

とはいえ、心のどこかでは、いつか知り合いがすべて消えて亡くなってしまった

らどうしよう、と考えているのかもしれないが、今のところその気持ちは表には出てこない。というよりは、押さえ込んで出ないようにしているのだろう。いつかは決着をつけないといけなくはわかっているが、今はどう対処してよいかわからないからだ。

この原稿を書いているとき——ちょうど広島、長崎の原爆投下の時期と重なっていた——、たまたまテレビで、長崎の原爆で家族を失った子どもたちの番組を観た。それは、すでに息を引きとった弟を背中に背負って火葬を待つ、直立不動の少年の写真（ジョー・オダネル撮影「焼き場に立つ少年」）を巡った番組だった。その少年の消息は掴めなかったものの、同じように一瞬のうちに親兄弟を亡くし戦後生き抜いた人たちの証言があった。すべてを失ったときに、悲しみよりも、今日、今、どう食っていけばよいのか、どこで寝れ

ばよいのか、そのことを考えると涙も出ないという証言がいくつかあった。親戚をたらい回しにされ、そこで陰惨なイジメにもあい自殺した兄弟の記憶は彼ら彼女らにとって最も話すことを躊躇うものだった。

その体験を知ると、いわば自然の摂理として親や知人たちの死と向き合うのとは違う次元であること、そして、ここでのさまざまな証言は、やがて訪れるであろう自身の孤独とは比べものにならないくらい不条理で、納得のいくものではなかった。しかも、今では、証言者たちは一家をなす身になっており、きっとそこまでの間には、いくつかの「正念場」に対峙し、乗り越えてきたんだ、とは思いつつも、それを「正念場」というのは相応しくないのではないかと感じた。

今のところ、私には、まだ突然の事態は生じていない。幸い、と言うしかないのだが、立ち止まりながら深く考えることをただ先延ばしにしているだけなのかもしれない。そして、ひょっとすると自分の「正念場」とは、このことなのかもしれない。ずっと先送り先送りしていたものが、いつか否が応でも正視しないといけなくなる事態のことだ。そのときにじたばたしたくない、そのために何をしておけばよいのか？ いや、何かをすればよき結論が出るような因果律はここでは通用しないだろう。これから死ぬまで、あるいは死ぬ直前の事態についてどう対処するかは、もう残りの人生そのものがきっと解決してくれるに違いない。解決できないという選択肢も含めて。

どんなことが起こっても、これだけは本当だと思うこと

堀内 勉 (多摩大学社会的投資研究所教授・副所長)
HORIUCHI Tsutomu



1960年東京生まれ。東京大学法学部卒業、ハーバード大学法律大学院修了、Institute for Strategic Leadership(ISL)修了、東京大学 Executive Management Program(EMP)修了。日本興業銀行、ゴールドマンサックス、森ビル・インベストメントマネジメント社長を経て、2007年から2015年まで森ビル取締役専務執行役員兼最高財務責任者(CFO)。現在、多摩大学社会的投資研究所教授・副所長、多摩大学大学院特任教授、ボルテックス100年企業戦略研究所所長、田村学園理事・評議員、麻布学園評議員、社会的投資推進財団評議員、立命館大学稲盛経営哲学研究センター「人の資本主義」研究プロジェクト・ステアリングコミッティー委員、日本CFO協会主任研究委員などを務める。著書に『読書大全——世界のビジネスリーダーが読んでいる経済・哲学・歴史・科学200冊』(日経BP)、『コーポレートファイナンス実践講座』(中央経済社)、『ファイナンスの哲学——資本主義の本質的な理解のための10大概念』(ダイヤモンド社)、『資本主義はどこに向かうのか——資本主義と人間の未来』(共編著、日本評論社)など。

『読書大全』の執筆

2021年4月に『読書大全——世界のビジネスリーダーが読んでいる経済・哲学・歴史・科学200冊』(日経BP)を上梓した。タイトルにあるとおり、人類の歴史に残る重要な本を200冊ピックアップして、その書評をコンパクトにまとめたものである。

コロナ禍の中で在宅時間が増え、またこの先の世界や社会のあり方に想いを馳せる機会も多くなったことで、難解で分厚い本(「鈍器本」と呼ばれている)が売れているようで、488頁という大部な本書も、そこそこの売れ行きを見せている。

その前半に、私がなぜ読書に没頭するようになったのか、読書によって何が得られるのかを、私の半生の振り返りとともに記したのだが、意外にもそれが反響を呼んで、各方面から数多くの講演依頼をいただくようになった。

最初のころは、この本の内容とか構成を中心に話していたのだが、それよりは私の人生経験そのものについて話してほしいという依頼が多くなり、最近の講演では、私の人生経験が「主」で、そこに読書がどう関わっているのかが「従」という形になっている。

そこで、本稿では、特集テーマ「正念場」との関わりで、私の人生経験とそこから得た私なりの教訓について触れてみたいと思う。

私の半生と「正念場」

私の人生の前半はかなり平凡なも



堀内勉『読書大全——世界のビジネスリーダーが読んでいる経済・哲学・歴史・科学200冊』(日経BP, 2021年)

のだった。経済白書が「もはや戦後ではない」と謳い、初の東京オリンピックが開催された時代、高度成長期の入口の1960年に東京で生まれた。当時のどこの家庭もそうであったように、とにかく子どもには良い教育を受けさせなければという親の意向で進学校から大学に進学し、銀行に就職して普通のサラリーマンになった。

生まれ育ちも平々凡々としていて、家庭は貧乏でも金持ちでもなく、家族も全員健康だったので、大きな不幸を味わったこともなければ、逆にエキサイティングなことも何もなかった。当時の銀行というのは安定していて、間違いのない人生の代名詞のようなものだったので、就職してからもこの平凡な人生がずっと続くのだろうなという漠然としたイメージを持っていた。

その予定調和が大きく崩れたのが、1997年に日本を襲った金融危機

である。エズラ・ヴォーゲルの『ジャパンアズナンバーワン——アメリカへの教訓』（TBSブリタニカ）がベストセラーになったのが1979年で、そこから日本はバブルの坂を駆け上がるのだが、そのバブルが弾けるのが1990年、そこから日本は奈落の底に転落していくことになる。

そして、ついに日本経済が音を立てて崩れ始めたのが1997年の大蔵省接待汚職事件をきっかけとした金融危機である。この詳細はここでは省略するが、それまで隠蔽に隠蔽を重ねてきた裏で積み上がった不良債権の重みで、北海道拓殖銀行や山一証券といった大手金融機関が次々と倒れ、私が勤務していた大手銀行もその渦中に巻き込まれていった。

当時、私は銀行の経営企画セクションで、銀行の格付けやIR（投資家対応）などを担当しており、巨額の不良債権の存在を隠しながら銀行を守らなければならない立場にあり、精神的にかなり追い詰められていた。その最悪のタイミングで、大蔵省（現在の財務省と金融庁）と銀行・証券会社との癒着に目を付けた東京地検特捜部が介入してきたことで、金融界は大混乱に陥り、何人もの逮捕者と自殺者が出るほどの大事件に発展した。

私自身も何度となく東京地検に呼び出され、結局、「刀折れ矢尽き」という思いで、もはや精魂尽き果てて銀行を離れることになった。次から次へと問題が噴出する銀行に愛想が尽きたというのが本音だが、それにしても、まさか自分が銀行を辞めることになるなど想像さえしていなかった。

それが37歳のときだったが、そこから波乱に満ちた私の後半生が始まることになる。まず、銀行の中枢にいて不良債権問題などすべてを知り尽くしていた私が、競合相手である外資系証券会社に転職するということが人事部が激怒し、銀行を追われるように退職するはめになった。東京地検に取り調べを受けたころから

不眠症が始まり、さらに銀行との関係がこじれたことで徐々に鬱状態になり、転職先では精神科に通い大量の薬を飲みながら仕事を凌ぐことになった。

精神的に追い詰められ睡眠も取れない中でのハードな外資系での仕事に、毎日イライラして配偶者とも喧嘩ばかりしていた。そんなある日、いつもどおり夜遅く家に帰ると、中はもぬけの殻で、飼っていた猫も含めて、私の私物以外何も残されていなかった。後日、配偶者から離婚届が送られてきて、私は安定した（と信じていた銀行という）仕事も家庭も同時に失ってしまった自分に気づかされることになる。

元々、情熱を持って始めたわけでもない金融という仕事だけを生活の糧に、数千万円という住宅ローンが残ったマンションの一角でポツと1人取り残されていると、そもそも生きている意味がわからなくなってくる。ここで自分が死のうが生きようが、世の中の大勢には何ら関係はないし、ただ目的もなく残された時間を消化していただくだけの人生に何の意味があるのか……。私は完全に道に迷っていた。

私にとっての読書の意味

今思えば、あれが私の「正念場」だったのだと思う。あのときにもう少し道を誤っていたら、自分はもはやこの世には存在していなかったのではないだろうか。

そんなときに手に取った1冊が、日本のフィクサー（黒幕）と呼ばれた瀬島龍三の『幾山河——瀬島龍三回想録』（産経新聞社）だった。という経緯だったかは覚えていないが、私の父親が陸軍士官学校の出身だったこともあり、陸軍大学を主席で卒業して大本営という軍隊の中枢にいたエリート軍人が、過酷なシベリア抑留を経て伊藤忠商事の会長にまで上り詰め、その後、中曽根内閣



瀬島龍三『幾山河——瀬島龍三回想録』（産経新聞社、1995年）

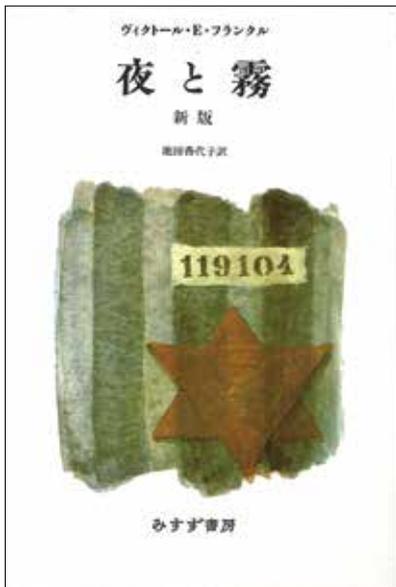
での行政改革に尽力したという波瀾万丈の人生に興味を持ったからだと思う。瀬島は、山崎豊子のベストセラー小説『不毛地帯』のモデルにもなっている。

その一節に、「人間性の問題」という次のような文章がある。

自身が空腹のときにパンを病気の友に分与するのは、簡単にできることではない。しかし、それを実行する人を見ると、これこそ人間にとって最も尊いことだと痛感した。「自らを犠牲にして人のため、世のために尽くすことこそ人間最高の道徳」であろう。それは階級の上下、学歴の高低に関係のない至高の現実だった。

私は幼少より軍人社会に育ち、生きてきたので、軍人の階級イコール人間の価値と信じ込んできたが、こんな現実に遭遇して、目を覚まされる思いだった。軍隊での階級、企業の職階などは組織の維持運営の手段にすぎず、人間の真価とは全く別である。

それまで銀行というピラミッド社会を生きてきた自分も、こうした人間の真実に気づかないまま、「会社内の階級イコール人間の価値と信じ込



V.E.フランクル、池田香代子訳『夜と霧 新版』
(みすず書房, 2002年)

んできた」ではなかったか。自分の内面というのは本当は何もない空洞に過ぎなかったのではないか。そうした思いが心の中で渦巻いた。

さらに、ヴィクトール・フランクルの『夜と霧』(みすず書房)の次の一節にも、頭を殴られるような衝撃を受けた。フランクルはユダヤ人の精神科医で、ナチスドイツ時代のユダヤ人強制収容所での過酷な生活を生き抜き、解放後に著した同書が、世界的なベストセラーになっていた。

人は強制収容所に人間をぶちこんですべてを奪うことができるが、たったひとつ、あたえられた環境でいかにかまうかという、人間としての最後の自由だけは奪えない。(中略)ここで必要なのは、生きる意味についての問いを百八十度方向転換することだ。わたしたちが生きることからなにを期待するかではなく、むしろひたすら、生きることがわたしたちからなにを期待しているかが問題なのだ、ということを知り、絶望している人間に伝えねばならない。哲学用語を使えば、コペルニクスの転回が必要なのであり、もういいかげん、生きることの意味を問うことをやめ、わたしたち自身が問いの

前に立っていることを思い知るべきなのだ。

つまり、われわれ人間は、常に「生きる」という問いの前に立たされておられ、それに対して実際にどう答えるかがわれわれに課された責務なのだということである。それまでの私は、自分の身に降りかかる不幸を嘆いてばかりいた。なぜ自分だけがこんな目に遭わなければならないのか、どこで道を踏み外してしまったのか、あのときにああすればよかった、こうすればよかったと、ひたすら自分の運命を呪っていた。そんな私の姿を見て、配偶者も含めて周りの人々が離れていった。

そのときに会ったのが、以下のような徳川家康の遺訓である。

人の一生は重荷を負ふて遠き道
を行くが如し 急ぐべからず 不
自由を常とおもへば不足なし 心
に望み起こらば困窮したる時を思
ひ出すべし 堪忍は無事長久の基
怒りは敵と思へ 勝つことを知
りて負くることを知らざれば害そ
の身にいたる おのれを責めて人
を責めるな 及ばざるは過ぎたる
に勝れり

この言葉は以前から知ってはいたが、天下人の徳川家康というのは実は苦勞人だったのだなという程度の認識しかなく、その真意については深く考えてみたこともなかった。

それが、そのときの私の心には、とても深く染み込んでいったのである。それから10年ほどは、この遺訓を小さなコピーに取って財布の中に入れて、何か苦しいことがあるたびにそれを読み返していた。

どんなことが起こっても、これだけは本当だと思うこと

この時期の私には、世の中の景色がすべて灰色に見えていた。とても不思議な感覚なのだが、色の区別はつ

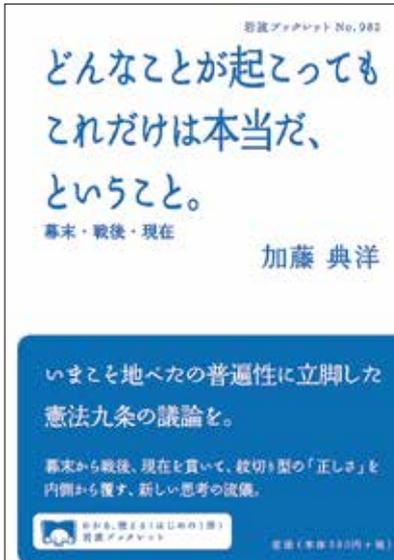
いても、それが美的な感覚としての色としては見えてこないのである。おそらく、精神が鬱状態の中で、色の美しさを受け入れるこちらの感覚が麻痺していたのだと思う。

それが、こうした本の力も借りて少しずつ精気を取り戻し、少し運動でもしようかと思い散歩に出かけたある日、突然、世界から色が戻ってきた。灰色の風景に一気に色が戻ってくる感覚は感動的でした。そのときに、私が今ここに生きているのは自分一人の力ではなく、何か自分を超越した大きな力によって生かされているのだという確信を抱いた。「確信」という意味で、あれほど強い思いを持ったことは、それまでの人生で一度もなかった。そこに科学的な証明が介在する余地はないのかもしれないが、その「生かされている」という実感は、私にとって何物にも代え難い「真実」だった。

これが、本稿のタイトルにつながるのだが、文芸評論家の加藤典洋の著書の1冊に、『どんなことが起こってもこれだけは本当だ、ということ。——幕末・戦後・現在』(岩波書店)がある。

その中に、映画監督の宮崎駿の『千と千尋の神隠し』についての、次のような創作秘話が出てくる。

宮崎さんは、養老孟司さんとの対談で、なぜ『千と千尋の神隠し』を作ったか、と尋ねられ、こう答えています。あるとき、たまたま10歳くらいの子供たちを見ていた。そしたら、自分は彼らに対し、いま何が語れるだろうか、という考えが浮かんだ。最後には正義が勝つ、なんて物語を語ろうという気にはさらさらなれなかった。そうではなく、「とにかくどんなことが起こっても、これだけはぼくは本当だと思う、ということ」、それを語ってみたい、と思った。そして、この最初のモチーフを手放さないでいたら、『千と千



加藤典洋『どんなことが起こってもこれだけは本当だ、ということ。——幕末・戦後・現在』（岩波書店、2018年）

尋』ができた、というのです。

宮崎が「どんなことが起こっても、これだけは本当だと思うこと」とは何だったのか。それは本人にしかわからないが、加藤はそれを次のように解釈している。

世界には不正がある。しかしいつでもどんな場合でもそれを覆し、是正できるとは限らない。とはいえ、だからといって何もできないわけではないし、何をしても無駄だということでもない（……）。できないことがある。しかし、その限られた条件のなかでも、人は成長できる。また、「正しい」ことを、つくり出すことができる。

これが宮崎のモチーフの中身だというのである。

私は最近の講演の中で、聴衆に対して最後に、「あなたにとって、『どんなことが起こっても、これだけは本当だと思うこと』とは何ですか？」と聞くようにしている。

たいていの場合、誰も即座には答えられない。でも、即座に答えられるか答えられないかは問題ではない。大切なのはその問いに対して真摯に向き合うことである。先述したよう

に、フランクは、「わたしたちが生きることからなにを期待するかではなく、むしろひたすら、生きることがわたしたちからなにを期待しているかが問題なのだ」と語っている。「どんなことが起こっても、これだけは本当だと思うこと」と向き合うことと、「生きることがわたしたちからなにを期待しているか」を考えることは、実は同じことを言っているのだと思う。

『夜と霧』の中で、フランクはこうも言っている。

生きることは日々、そして時々刻々、問いかけてくる。わたしたちはその問いに答えを迫られている。考えこんだり言辞を弄することによってではなく、ひとえに行動によって、適切な態度によって、正しい答えは出される。（中略）この要請と存在することの意味は、人により、また瞬間ごとに変化する。したがって、生きる意味を一般論で語ることはできないし、この意味への問いに一般論で答えることもできない。ここにいう生きることとはけっして漠然としたなにかではなく、つねに具体的ななにかであって、したがって生きることがわたしたちに向けてくる要請も、とことん具体的である。この具体性が、ひとりひとりにたったの一度、他に類を見ない人それぞれの運命をもたらすのだ。だれも、そしてどんな運命も比類ない。どんな状況も二度と繰り返されない。そしてそれぞれの状況ごとに、人間は異なる対応を迫られる。

つまり、人生というのは自分の外にある何か抽象的な概念ではなく、常に特定の個人と紐づけられた具体的に1回限りのものなのである。そして、その1回性の具体的な問いに対して実際にどう応えるのか、その細かい日々の積み重ねがその人の「人生」を築き上げていくのである。

だから、自分の人生は自分で生きるしかなく、他人の人生を生きることもできなければ、他人に自分の人生を生きてもらうこともできないのである。ここで断っておくが、「他人の人生を生きる」と「他人のために生きる」とはまったく別物である。後者はまさに「自分の人生を生きる」ということにほかならない。

自分の人生を生きる

アップルの創業者のステーブ・ジョブズは、スタンフォード大学の卒業式で行った有名なスピーチの中で、次のように語っている。

他人の人生を生きることで時間を無駄にしてはいけない。（“Your time is limited, so don’t waste it living someone else’s life.”）

また、多くの名言を残した女優マリリン・モンローの言葉に、次のようなものがある。

私が私でなくなってしまうのであれば、何になっても意味がない。（“Wanting to be someone else is a waste of the person you are.”）

子どものころから他人の評価に身を委ねることに慣らされてしまっている多くの「真面目な」日本人は、もしかしたら他人の人生を生きることに一生懸命になってしまっているのかもしれない。

私がいとも講演の最後で述べるのは、「皆さん、自分の人生を生きてください」というごく短い言葉である。人生の「正念場」は、われわれの心身にまわりついた垢を落としてくれる劇薬でもある。しかし、「もうこれ以上前に進めない」、そうした「正念場」に遭遇したとき、ぜひ、この言葉を思い出してもらいたいと思う。

「正念場」が露わにしたこと

増田 聡 (大阪市立大学大学院文学研究科・文学部教授)
MASUDA Satoshi



1971年北九州市生まれ。大阪大学文学部美学専攻卒業、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程修了。博士(文学)。国立音楽大学ほかの非常勤講師、大阪市立大学大学院文学研究科講師、准教授などを経て、現在、大阪市立大学大学院文学研究科文化構想学専攻・文学部教授。日本音楽学会西日本支部役員、日本ポピュラー音楽学会理事・学会誌編集委員長などを歴任。専攻は音楽学、メディア論、大衆文化論。著書に『聴衆をつくる——音楽批評の解体文法』(青土社)、『この音楽の〈作者〉とは誰か——リミックス・産業・著作権』(みすず書房)、共著に『音楽未来形——デジタル時代の音楽文化のゆくえ』(谷口文和との共著、洋泉社)、『ポストコロナ期を生きるきみたちへ』(内田樹編著、晶文社)など。

自宅籠城の日々

中学生の息子が新型コロナウイルスに感染した。

すぐさま一家4人で自宅籠城を決める。感染者の隔離など不可能な狭いマンション住まいなので、私を含む他の家族も濃厚接触者となるだろうし、いずれは感染するだろう。諦めて養生するしかない、と腹をくくる。おそらくは感染が急拡大しているためだろう、保健所からの指示の電話はなかなかかかってこない。仕事や学校、当面の生活をどうするか。とりあえずは家を一步も出ないことにして、当面の生活の想定をする。冷蔵庫の肉と野菜は週末までは持つか。米もある。まあ外出できなくても2~3日は飢え死はしないか、などと考える。

まずは身近な人々に控えめに連絡する。仕事はオンラインでなんとかなりそうだ。ありがたいことに近所の友人知人からは「できることがあればなんでもやるよ」と申し出が相次ぐ。まあこれだけ「コロナに感染したら大変」と喧伝されている世の中である。友人知人がそうなればこっちもそうするだろう。お互い様である。

みな息子の病状を心配してくれるが(ありがたいが)それ自体はさほど大したことはない。息子は熱はあるが元気にゲームなどしている。むしろ「コロナに感染した家族がいるとき自分はどこまでの範囲で社会生活が許されるか」の判断が難しい。私にも基礎疾患のある見ず知らずの他人に感染させてはまずい、と考える

くらいの社会性はある。マンションのエレベーターのボタン、これは指で押しても良いか(ティッシュなどで指を覆うべきか)、新聞や郵便物などを取りにいくとき他の住人と出くわしたらどうするか。そういった些細なこと(しかし当座は重要と思えること)ばかりにあれこれと思い悩む。毎朝忍者のように小走りで1階のエントランスの郵便ボックスを覗き、逃げるように自室に戻る。滑稽ではあるがわりと真剣である。コロナ禍とは「自分の問題」であるよりも「いかに他人に迷惑をかけないように振る舞っているかを周囲に証を立てるか」で心が悩まされる災厄なのだなあと思い知る。

下の息子にも熱が出始めたころ、ようやく保健所から電話がある。最初に発熱した息子はめでたく制度的に新型コロナ感染者として扱われ、発症後順調に回復し、2週間経過すれば自宅待機は解除され通常の生活を送ることができるらしい。だが発症していない濃厚接触者がいつまで自宅待機となるのかについての説明は当を得ない。一応感染状態の家族との最終接触の後、2週間の自粛を「お願いしている」とのことであるらしいが、職場の判断でそれよりも早期に出勤は可能ともいう。またPCR検査の受診も必須ではないようで、もごもご要領を得ない説明が続く。保健所も年明けの感染爆発で上の方針変更には振り回されているのだろう、確固とした指示を下せる状況ではないことは推察された。「自助」とはこういう事態で国民に求められる態度を指す言葉なのだろう。

翌日、なんとかPCR検査を受診

することができ、これもまた結果を数日待つ（その間にネットスーパーなどで食料を調達する）。妻と下の息子は陽性、私自身は陰性との結果であった。自宅で「濃厚接触」を継続しておいてこれなので、まあ免疫（と悪運）が強かったということなのだろう。保健所によれば陰性の濃厚接触者は「不要不急ではない外出」は最低限であれば可能ということなので、スーパーなどへの買い出しの外出は私一人であれば可能、ということになった。大学には出勤せずのんびりと過ごすことにする。生活そのものというよりも「こういうことがあなたには許されている」という宣告を受けるまでが一騒動、という気分である。

というわけで半月ほどはわが家も疫病の影響を被ったわけだが、その間ぼんやりと考えていたのは（この原稿が書けず苦渋していたこともあったが）、はたしてこれは「正念場」なのだろうか、ということだ。確かに通常の生活からするとイレギュラーな対応に迫られ、あれこれと気を揉むことも多い日々ではあった。だがニュースなどでおどろおどろしく報道されるような「コロナに感染したらもうおしまい」といった致命的な状況には遠く及ばない。息子2人も妻も多少発熱はしたものの2日ほどで回復し、その後、味覚異常などの後遺症も特に見られない。「コロナに感染したら終わり」という報道に慣らされてきたせいも、最初感染が発覚したときには戦慄したものだが、やがてそれも「日常」に回収されていくものなのだというのがわが家の感染経験からの感慨であった。「感染防止には今が正念場」などという言葉がマスコミでは盛んに飛び交うが、「正念場」とはそんなに安売りする言葉ではないだろう。

「正念場」と「修羅場」

「正念場」と「修羅場」とは似て



忍者のように小走りで郵便ボックスを覗く

いるが異なる。正念場とはそもそも歌舞伎由来の用語で、登場人物の見かけではなく「その本当のあり方」を露わにするような張り詰めた場面を指す語、とされる。一方、修羅場とは阿修羅と帝釈天との血生臭い争いから転じた仏教語由来の概念であり、常時を外れた一大事ではあるものの、そこに直面した人物の本質への問いを含むものではない。いずれも「切羽詰まった」場面を指す似通った概念ではあるが、決定的な点で異なることを確認しておきたい。

言い換えれば、「修羅場」とは（本人の振る舞い次第で）そこから逃れることが可能だが、本人の預かり知らぬ運命の働きによって逃れることができないものが「正念場」、ということになるだろう。恋愛沙汰の切迫した局面はしばしば「修羅場」と呼ばれるが、それが「正念場」と言い換え難いのはそのためだ（恋愛沙汰ごときで人はその本質を問われることはない。重要なのは「その前後の振る舞い」なのだろう）。そこに出くわしたならば何らかのかたちで人がその本質を問われることになる局面を指して、人は「正念場」と呼びならわしている。であればわが家の直面したコロナ感染などという「正念場」の名に値しない。日常から離れた生

活の変容やそれに伴うさまざまな不如意、それ自体は決して正念場そのものを意味しない。そのことによって私の「本質」などはまったく露わになるものではない。

「正念場」についていくつかの辞典を徴すると、しばしば「菅原伝授すがわらでんじゅの手習鑑てならいかがみ」の首実検の場面が例として示されている。かくまった菅秀才（菅原道真の嫡男）の身代わりとしてわが子、小太郎の首を討たせ、その後の首実検の場面でわが子の首を見据えつつも、動揺を隠して「この首は菅秀才に相違ない」と言い切る松王丸の置かれた場面、それはまさしく松王丸という（忠義に徹する）人物の本質が露わにされる場面であるのだろう。だが私は、そのような切迫した場面には（幸いなことに）今回直面することはなかったし、今後も願わくば出会うことなく残りの人生を送りたい、と切に思う。

「正念場」の概念の背後には、人の本質が明らかになるような局面には「苦しさ」が必然的に付随する、という考えがある。日常にはあり得ない苦難に直面したときにこそ人はその本質を明らかにする、というわけだ。確かに松王丸のそれは演劇的に仕立て上げられた苦悩であり、その苦悩を通じて忠誠心という「本



阿修羅と帝釈天の修羅場

質」が明らかになるのであろう。だがしかし、できることならばそのような苦悩への直面は避けたいと思うのが人の情である。演劇では見せ場になるだろう「正念場」は、その苦悩のゆえに現実の人間の生活にあっては歓迎されることはない。わが家も新型コロナ感染など面倒な苦労を被ることは避けられるならば避けなかった（大した苦労ではなかったとはいえ）。せいぜいそれは単なる苦労でしかなく、私や家族の「本質」とやらを（松王丸のように）さらけ出すような場面になることがなかったのはありがたいことである。

外から自分を眺める

そもそも演劇ならぬ人生において、「正念場」にそれほど意義はあるのだろうか。私自身の人生を振り返るに、「正念場」といえるような「自分の本質を明らかにするような苦悩を伴った場面」があっただろうか、と思いつくが、そのようなものがあつたようには感じられない。九州の田舎の平凡な中流階層に生まれ育つた私には、「正念場」と呼びうる困難な局面を迎えることなく平々凡々とした人生をこれまで送ってきたのだな

あという感慨しかない。経済的には裕福でもないが貧しくもない中流の暮らしであったし、そのような「平凡な」生活を疎い大阪の大学に入って一人暮らしを始めてからも、生来の物臭と臆病で大した冒険的な振る舞いにも及ばずなんとなく流されてこの歳まで生きながらえてきたように思う。

受験や就職などもとうてい「正念場」と呼べるような、自身を問い詰める厳しい局面であったとは思えない。友人知人が語る「自分にはこのような厳しい局面があった」という自慢話に感心して耳を傾け、若い時分にはそれを羨んで多少の無頼や放蕩を気取ることもあったが、それも「人物のその本質をあらわにする」ようなものであつたわけでもない。むしろそれに付随した「修羅場」ならばいくつかは思い出すことはできようが、それも短慮に基づく自業自得の範囲を越えるものとは思えない。

「人の本質」とは、単一の場面に集約されて決定的に露わになるようなものではない。日常の中でだらだらと間延びしたかたちで「人の本質」は間欠的に露わになる瞬間もあるのだろうが、それが固有の場面を構成することは稀だ。思うに、演劇なら

ぬ人生において、松王丸が直面したような「正念場」はよほど周到にデザインされなければ現れることがないのではないか。単なる修羅場ならば自身の山っ気や怠惰によりいくらでも招き寄せることはできよう。だが、修羅がいかにか派手に暴れたとしても修羅場が正念場となることはない。苦悩や苦労の強度は決して「正念場」の十分条件とはならないのだ。

いやもちろん、戦争や災害などの厳しい局面において、まさに「正念場」としか言わざるを得ない人生の岐路に立たされてきた人が数多くいることは頭では分かっている。その正念場を乗り切った英雄的な精神には敬意を惜しまない。だが小市民たる私が「正念場」について思うことは、可能であればそのような「正念場」に立つことを避けたいという切実な願いであるし、もしも不幸にして「正念場」に立たされることがあつたならば、そのときには少なくとも「みっともない様を晒したくない」ということだけであるに過ぎない。

しかし、そのような「みっともない様を晒したくない」という願望を持ってしまふことが、すでに「正念場」の観念から自由ではないことを示しているのかもしれない。「みっともない」かどうか、を気にすること、すなわち自分の外側の視点から自分を眺める視線への意識がそこにはあるからだ。外から自分を眺めることができ、そこから「人の本質」を俯瞰できるとする（あたかも劇場の観客として自分の人生を眺めうるといった）思考の支配があるからだ。

そのような「自分自身を査定する視線を内在化すること」がいらぬ苦悩の始まりなのである（旧約聖書に描かれる最初の人類もそうだったように記憶する）。だが、だからといってそのような外から自分を眺める視点を捨て去る、言い換えれば「正念場」という概念をきれいさっぱり忘れて生きるのもまたよろしくないような気がする。言い換えれば「人と

して生きるための必要条件」を捨て去ってしまうのもまた潔くない、とも思える。もやもやと考えは定まらない。この原稿もなかなか先に進まない……。

「本質」が露わになるということ

白状しよう。この文章の執筆には本当に苦渋している。締め切りをすでに半年近く過ぎ、度重なる督促にも書き進める気が重く、刊行目前になっても深夜まで延々と難渋しているありさまだ（この半年のあいだ、この原稿のことばかりを悶々と考えて他の仕事もひどく滞った）。「正念場」ということについて考えたことを言葉にするのにこれほどまでに苦悩するとは（気軽に引き受けたときには）まったく思ってもみなかった。編集部にはほんとうにご迷惑をおかけしており申し訳が立たない。そのこともまた私を苦悩させる。

物を書くときに筆が進まないのは「みっともない様を晒したくない」という見栄に強く囚われているためだ。知見が狭く底の浅い思考を飾り立てた言葉で粉飾した文章は世の中にありふれているが、自分の名前でも世に出す文章がそのような「みっともないもの」の1つに数えられることに卑小な虚栄心は我慢がならないのだ。そして七転八倒して気の利いた文章を捻り出そうとしてもどうしようもなく言葉が出ず、もはや刊行ぎりぎりになってもまだ言葉を飾り立てようとしている自分に対する苛立ちと情けなさと、そしてそのような自分自身を査定する視線との間でがんじがらめになって、深夜になっても筆が進まず早朝まで苦渋が続いているありさまだ。不様である。

これほどまでに依頼された文章執筆に苦渋したことはなかった。それは私がこれまでに「正念場」と向き合うことなく、それをひたすら回避して生きてきた帰結なのだろうと思う。ある場面で露わになるような



「菅原伝授手習鑑」の首実験

「自分の本質」などありえない、そのようなものと向き合うことはバカバカしい、そういった考えに固執して（というか依存して）人生のさまざまな局面をやり過ごしてきたためなのだろうと思う。とりあえずはそれで「なんとかうまくやってきた」わけだが、そこには私自身がまったく気付いていない何らかの抑圧があるのだ。そこから目を逸らしたいのである。

であるからこそ、いったん「正念場」といった観念について考え始めると、少しばかり気の利いた言葉を用いてそれに向き合うことを回避しようとするあまり、言葉に詰まる羽目になる。「正念場」について考えることがあたかも禁止されているかのように進まない、ということは、私が自分の存在を脅かすものとしてそれを強く恐れているということなのだろうと思う。「自分の本質」といったものが存在し、それが露わになることへの恐怖がそこにはあるのだろうと思う。皮肉なことだが、正念場という語について考え、文章をまとめよという依頼こそが私にとっての「正念場」だったのかもしれない。

私は弱い人間であり、かつ「他人からよく見られたい」人間である。

そしてそうであることを恥じている。そのような「本質」はこの文章によって多少は露わになったのだろうか。それとも私の「みっともない様を晒したくない」という虚栄心によって、虚飾された言葉の集積に読む人はうんざりしているのだろうか。それはもうどちらでもよい。苦渋の末にどうにかこうにか規定の字数には達した。「正念場」という概念についてこれまで考えることを避け続けてきた人間が書き連ねることができない。ことといえばこれくらいでしかない。

（イラスト：奈路道程）

河合俊雄

論文

Kawai, T., "The tension and paradox between determinate and indeterminate state: Clinical, social, and cultural aspects." In Brodersen, E. & Amezaga, P. (Eds.), *Jungian Perspectives on Indeterminate States: Betwixt and Between Borders*, 2020, 209-220.

Kawai, T., Suzuki, Y., Hatanaka, C., Konakawa, H., Tanaka, Y., & Uchida, A., "Gender Differences in Psychological Symptoms and Psychotherapeutic Processes in Japanese Children." *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 2020, 17 (23), 9113. doi: 10.3390/ijerph17239113

Kawai, T., "Postmodern Consciousness in the Novels of Haruki Murakami: An Emerging Cultural Complex." In Singer, T. (Ed.), *Cultural Complexes in China, Japan, Korea, and Taiwan: Spokes of the Wheel*, 2021, 123-138 (再掲).

Mento, C., Silvestri, M. C., Merlino, P., Nocito, V., Bruno, A., Muscatello, M. R. A., Zoccali, R. A., & Kawai, T., "Secondary traumatization in healthcare professions: A continuum on compassion fatigue, vicarious trauma and burnout." *Psychologia*, 2020, 62 (2), 181-195.

著書

河合俊雄『100分de名著 ミヒャエル・エンデ「モモ」』NHK出版, 2020年.

河合俊雄『心理療法家がみた日本のところ——いま, 「ところの古層」を探る』ミネルヴァ書房, 2020年.

河合俊雄「スイスでの七年の修業時代」, 公益財団法人上廣倫理財団(編)『私の修業時代2』弘文堂, 2021年, 145-176頁.

河合俊雄「はじめに——京都ところ会議について」, 河合俊雄, 吉岡洋, 西垣通, 尾形哲也, 長尾真(著)『「ところ」とアーティフィシャル・マインド』創元社, 2021年, 3-5頁.

河合俊雄「心理療法における暴力の浄化とその危険——ユングの体験から」, 鎌田東二(編)『心身変容と医療/表現~近代と伝統——先端科学と古代シャーマニズムを結ぶ身体と心の全体性』日本能率協会マネジメントセンター, 2021年, 278-286頁.

監修

C・G・ユング(著), E・ファルツェーダー(編), 河合俊雄(監修), 猪股剛, 小木曾由佳, 宮澤淳滋, 鹿野友章(訳)『ETHレクチャー 第1巻 1933-1934 近代心理学の歴史』創元社, 2020年.

解説

河合俊雄(著), 河合俊雄(解説)『中年危機』朝日新聞出版, 2020年, 219-226頁.

学会発表

Kawai, T., "Introduction: Narratives for Personal and Collective Transformation." The Narratives in times of radical transformation Conference 2020. (Online), 2020.11.19-20.

河合俊雄「心理療法とところの古層」日本心理臨床学会第39回大会ミニ・レクチャー, (オンライン), 2020.11.20-26.

河合俊雄「助産とじねんの時——現代医療と自然のはざままで」第35

回日本助産学会学術集会特別講演2, (オンライン), 2021.3.20-21.

講演

河合俊雄「コロナの危機へのこころの受けとめ方——文化・組織・個人の視点」一般社団法人地域企業振興協会研修会(からすま京都ホテル, 京都市), 2020.7.30.

河合俊雄「変わるこころ, 変わらないこころ——大きな物語と小さな物語」オンラインシンポジウム「コロナで変わる? 代える? 選る? わたしたちの社会」Vol.2, (オンライン), 2020.8.12.

新聞

河合俊雄「新しい文化的装置の共有が必要」(未来のコンパスProject 特別寄稿『新たな可能性』), 京都新聞, 2020.7.1.

テレビ出演

NHK Eテレ「100分de名著 ミヒャエル・エンデ『モモ』」

第1回2020年8月3日(月)午後10:25-10:50

第2回2020年8月10日(月)午後10:25-10:50

第3回2020年8月17日(月)午後10:25-10:50

第4回2020年8月24日(月)午後10:25-10:50

講演録

中沢新一, 河合俊雄, 桑原知子「河合俊雄と仏教」『箱庭療法学研究』2020, 33(1), 75-89.

広井良典

論文

広井良典「有限性の経済学に向けて」『ひらく』2020.(3), 109-124.

広井良典「ウィズコロナ時代と分散型福祉社会」『ガバナンス』2020, (232), 14-16.

広井良典「ポスト・コロナの社会構想——分散型システムと『生命』の時代」『ACADEMIA』2020, (177), 17-25.

広井良典「ポスト成長社会のデザイン——気候変動とパンデミックを超えて」『建築雑誌』2020.(1740), 3-6.

広井良典「無の人類史・序説」『ひらく』2020.(4), 171-185.

広井良典「生と死のグラデーション——『わたしの死』と死生観」『臨死死生学』2020.25(1), 19-21.

広井良典「ポスト・コロナの社会構想——分散型システムへの移行と『生命』の時代」『労働の科学』2020.75(12), 708-712.

広井良典「人口減少・ポストコロナ社会のデザイン——SDGsとAI分析を視野に」『日経研月報』2021.(511), 4-12.

広井良典「定常化社会におけるベーシック・インカム」『日本の科学者』2021.56(2), 74-81.

広井良典, 福田幸二「AIを活用した政策提言と分散型社会の構想」『農業問題研究』2021.57(1), 8-14.

学会発表

広井良典「AIを活用した社会構想と政策提言」日本学術会議近畿地区学術講演会「未来の語り口——人間は神になれるか」京都大学国際科学イノベーション棟シンポジウムホール, (オンライン), 2020.9.22.

広井良典「持続可能な福祉社会——コロナ後の社会構想と人口減少社会のデザイン」, 第79回日本公衆衛生学会総会, (オンライン), 2020.10.20.

講演

広井良典「ポスト・コロナの社会構想——分散型システムへの移行と『生命』の時代」東京大学未来ビジョン研究センター「コロナと未来」研究Webinarシリーズ, (オンライン), 2020.10.14.

広井良典「AIを活用した社会構想と分散型システム」スマートシティ・インスティテュート設立1周年記念オンライン・フォーラム「地球環境との共存で実現するウェルビーイングシティ」, (オンライン), 2020.10.23.

広井良典「福祉の哲学とその空間化について」大阪大学・社会ソリューションイニシアティブ (SSI)「第12回 SSI サロン」, (オンライン), 2020.10.29.

広井良典「人口減少・ポストコロナ社会のデザイン——分散型システムへの移行とローカライゼーション」ローカルベンチャーサミット2020, (オンライン), 2020.10.30.

広井良典「ポスト・コロナの社会構想——分散型システムへの移行と『生命』の時代」国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST)「サイエンスアゴラ2020」開幕セッション, (オンライン), 2020.11.15.

Hiroi, Y. "Visions of Sustainable Welfare Society: Perspectives from AI and Human History." 2020 Ecological Civilization in Korea Conference, 2020.11.19. (収録動画配信)

広井良典「人口減少社会とこれからの医療・社会保障」, 日本医療政策機構シンポジウム「『医療システムの在るべき姿』への期待」(大手町ファイナンシャルシティ・グランキューブ, 東京都), 2021.1.22.

広井良典「分散型社会とローカライゼーション——SDGsと人口減少社会のデザイン」SDGs全国フォーラム長野, (オンライン), 2021.1.30.

広井良典「商店街の復権——商店街の新たな価値」京都商店街創生フォーラム2021, (オンライン), 2021.2.13.

新聞等掲載

NHK「特設サイト 新型コロナウイルス——専門家・著名人～私はこう考える」(インタビュー), 2020.5.15.

広井良典「情報から生命へ」京都新聞夕刊, 2020.5.21.

「コロナ禍の日本と政治——横並び意識転換 今こそ」(インタビュー) 朝日新聞朝刊, 2020.5.28.

広井良典「コロナ後 集中から分散へ」京都新聞朝刊, 2020.6.23ほか全国地方紙 (共同通信配信)

広井良典「生と死のグラデーション」京都新聞夕刊, 2020.7.21.

「この国はどこへ コロナの時代に」(インタビュー) 毎日新聞夕刊, 2020.7.21.

「持続可能な社会に移れるか」(インタビュー) 読売新聞朝刊, 2020.8.9.

広井良典「集中と分散」京都新聞夕刊, 2020.11.16.

広井良典「社会保障の世代配分議論を」京都新聞朝刊, 2021.1.19ほか全国地方紙 (共同通信配信)

広井良典「環境問題としての医療」京都新聞夕刊, 2021.1.22.

広井良典「生物多様性と『八百万の神様』」京都新聞夕刊, 2021.3.30.

テレビ・ラジオ等への出演

NHK「日曜討論 (宣言解除——日常生活は 経済再生は)」, 2020.5.31.

その他

「人工知能を活用した我が国社会の未来に関するシミュレーション」『令和2年版 科学技術白書』文部科学省, 20頁, 2020.6.16.

「読書日記 (『人口減少社会のデザイン』, 西垣通東京大学名誉教授執筆)」毎日新聞朝刊, 2020.9.15.

内田由紀子

論文

Uchida, Y., Takemura, K., & Fukushima, S. "How do socio-ecological factors shape culture? Understanding the process of micro-macro interactions." *Current Opinion in Psychology*, 2020, 32, 115-119.

De Almeida, I., & Uchida, Y. "Examining affective valence in Japanese and Brazilian cultural products: An analysis on emotional words in song lyrics and news articles." *Psychologia*, 2020, 61(3), 174-184.

Schouten, A., Boiger, M., Kirchner-Häusler, A., Uchida, Y., & Mesquita, B. "Cultural differences in emotion suppression in Belgian and Japanese couples: A social functional model." *Frontiers in Psychology*, 2020, 11, 1048. doi: 10.3389/fpsyg.2020.01048

前浦菜央, 中山真孝, 内田由紀子「日本における感動とAweの弁別性・類似性」『認知科学』2020, 27(3), 262-279.

Krys, K., Capaldi, C. A., Lun, V.M.-C., Vauclair, C.-M., Bond, M.H., Domínguez-Espinosa, A., & Uchida, Y. "Psychologizing indexes of societal progress: Accounting for cultural diversity in preferred developmental pathways." *Culture & Psychology*, 2020, 26(3), 303-319.

Nakayama, M., & Uchida, Y. "Meaning of awe in Japanese (con) text: Beyond fear and respect." *Psychologia*, 2020, 62(1), 46-62.

Krys, K., et al. "Societal emotional environments and cross-cultural differences in life satisfaction: A forty-nine country study." *The Journal of Positive Psychology*. Advance online publication. (in press). <https://doi.org/10.1080/17439760.2020.1858332>

Nakayama, M., Nozaki, Y., Taylor, P. M., Keltner, D., & Uchida, Y. "Individual and cultural differences in predispositions to feel positive and negative aspects of awe." *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 2020, 51(10), 771-793.

Koh, A.H.Q., Liew, K., 内田由紀子「ひきこもりの文化・社会的要因——文化心理学からの検討」『臨床心理学』, 2020, 20(6), 703-709.

Boiger, M., Kirchner-Häusler, A., Schouten, A., Uchida, Y., & Mesquita, B. "Different Bumps in the Road: The Emotional Dynamics of Couple Disagreements in Belgium and Japan." *Emotion*, 2020, (in press).

Liew, K., Uchida, Y., Maela, N., & Aramaki, E. "Classification of Nostalgic Music Through LDA Topic Modeling and Sentiment Analysis of YouTube Comments in Japanese Songs." *Proceedings of the 1st Workshop on NLP for Music and Audio (NLP4MusA)*, 2020, 78-82. <https://www.aclweb.org/>

- anthology/2020.nlp4musa-1.16
- Fukushima, S., Uchida, Y., & Takemura, K., "Do you feel happy when other members look happy? Moderating effect of community-level social capital on interconnection of happiness." *International Journal of Psychology*, (in press).
- Krys, K., et al., "Personal life satisfaction as a measure of societal happiness is an individualistic presumption: Evidence from fifty countries." *Journal of Happiness Studies*, (in press).
- Liew, K., Uchida, Y., dela Cruz, C., Lee, L.N., "Examining the cultural marginalisation theory of NEET/Hikikomori risk tendencies in Singaporean youth." *Psychologia*, (in press).
- 内田由紀子『『このころの文化』——コロナ禍の幸福と芸術の役割を考える』『CEL(Culture, Energy, & Life)』2021, 127, 20-25.
- 内田由紀子「日本における幸福と生きがい」『生きがい研究』2021,(27), 26-41.
- Takahashi, T., Uchida, Y., Ishibashi, H., & Okuda, N., "Subjective well-being as a potential policy indicator in the context of urbanization and forest restoration." *Sustainability*, 2021, 13(6), 3211.
- 田中芳幸, 津田彰, 内田由紀子, 高橋義明「日本・オランダ・コストリカ3か国におけるさまざまな幸福感と楽観性・悲観性との関連性」 *Journal of Health Psychology Research*, 2021, 33, 259-270.
- 著書**
- 内田由紀子『これからの幸福について——文化的幸福観のすすめ』新曜社, 2020年.
- 内田由紀子「新しい幸せのかたち——社会心理学」, 日立京大ラボ(編著)『BEYOND SMART LIFE——好奇心が駆動する社会』日本経済新聞出版, 2020年, 75-85頁.
- 福島慎太郎, 内田由紀子, 竹村幸祐「信頼関係がつむぐ主観的幸福感——野洲川流域アンケート調査に対するマルチレベル分析」, 脇田健一, 谷内茂雄, 奥田昇(編著)『流域ガバナンス——地域の「しあわせ」と流域の「健全性」』京都大学学術出版会, 2020年, 256-271頁.
- 学会発表**
- Koh, A. H. Q., Nakayama, M., & Uchida, Y., "The role of Kamamuta in times of threat." Poster presented at the 2020 Society for Affective Science virtual Meeting, (Online), 2020.4.24-5.28.
- Nakayama M., & Uchida Y., "Finding meaning after a natural disaster: Threat-based awe triggers meaning making." The 2020 Society for Affective Science virtual Meeting, (Online), 2020.4.24-5.28.
- Uchida, Y., "The Ways of Well-being and the Self: A Cultural Psychological Approach," The 14th International Symposium on Primatology and Wildlife Science, (Online), 2020.9.11.
- Krys, K., Uchida, Y., Capaldi, C., Cantarero, K., Torres, C., Işık, İ., Yeung, V., Haas, B., Teyssier, J., Andrade, L., Denoux, P., Igbokwe, D., Kocimska-Zych, A., Villeneuve, L., & Zelenski, J., "Towards cultural sensitivity in societal development paradigms and measures." [Conference presentation]. WAPOR 2020 Convention, Salamanca, Spain, (Online), 2020.10.6-9.
- Liew, K., Kraus, B. R., Tominaga, H., Nakao, G., Uchida, Y., & Kitayama, S., "The Emotion Suppression Effect of Interdependence is Stronger in Japan than the US." Paper presented at the annual conference of the International Cultural Neuroscience Society, (Online), 2020.10.8.
- Liew, K., Uchida, Y., Maeura, N., & Aramaki, E., "Classification of Nostalgic Music Through LDA Topic Modeling and Sentiment Analysis of YouTube Comments in Japanese Songs." Paper presented at the 1st Workshop on NLP for Music and Audio (NLP4MusA), (Online), 2020.10.16-17.
- 伊藤篤希, 内田由紀子, Gobel, M., Uskul, A. 「名声型リーダーと集団の探索的活動」日本社会心理学会第61回大会, (オンライン), 2020.11.7-8.
- Liew, K., 内田由紀子「機械学習による日中の社会的態度の探索的比較」日本社会心理学会第61回大会, (オンライン), 2020.11.7-8.
- Bowen, K. S., Uchida, Y., Takemura, K., Nakayama, M., & Ito, A., "Living alone in interdependent cultural contexts: Lower well-being is mediated by reduced social integration." Poster session presented at the 2021 Society for Personality and Social Psychology Preconference "Close Relationships", (Online), 2021.2.9-13.
- Koh, A., & Uchida, Y., "A cross-cultural exploration on the east of positive emotion experience in negative contexts." Poster presented at the 2021 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention, (Online), 2021.2.9-13.
- Liew, K., Uchida, Y., Koh, A., dela Cruz, C., Brown, C., & Lee, L. N., "From big data to theory: Danceability in music indicates cultural tendencies towards anger." Poster presented at the 2021 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention, (Online), 2021.2.9-13.
- Uchida, A., Nakayama, M., & Uchida, Y., "How is workplace contribution and reward attributed in Japanese compared to European American cultural contexts?" The 2021 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention, (Online), 2021.2.9-13.
- Liew, K., Hamamura, T., & Uchida, Y., "How to use Machine Learning in Cultural Psychology: A Case of Unpacking Cultural Differences in East-Asia." Poster presented at the Advances in Cultural Psychology Preconference, Society for Personality and Social Psychology Annual Convention, (Online), 2021.2.9-13.
- Krys, K., Vignoles, V., Uchida, Y., & de Almeida, I., "Outside the 'Cultural Binary': Understanding Why Latin American Collectivist Societies Foster Independent Selves." Culture & Values Webinar [Seminar presentation], (Tokyo, Japan), (Online), 2020.2.18.
- Krys, K., Vignoles, V., Uchida, Y., & de Almeida, I., "Outside the 'Cultural Binary': Understanding Why Latin American Collectivist Societies Foster Independent Selves." Iberoamerican University Seminar [Seminar presentation], (Mexico City, Mexico), (Online), 2020.3.24.
- 講演**
- Uchida, Y., "The ways of well-being and the self in Japan and the US." Developmental Psychology Colloquium (University of California, Santa Cruz), (Online), 2020.4.6.
- Uchida, Y., "Self-Construals as Value Systems in Nations and Organizations." Psychology Colloquium, (Stanford University), (Online), 2020.5.27.

内田由紀子「あなたにとっての幸せは何ですか」京都大学生協 X-academy 第2回, (オンライン), 2020.6.25.

内田由紀子「わたしたちはパンデミックにどう向き合うのか? 幸福観の文化差からの考察」京都大学オンライン公開講義「立ち止まって、考える」, (オンライン), 2020.8.23.

Uchida, Y. "Self-Construals and Well-being as Value Systems." Berggruen Institute Seminar. (Online), 2020.8.27.

内田由紀子「Well-being 研究と教育政策への活用」文部科学省 AI 時代・人生100年時代における人間力向上検討に向けた有識者ヒアリング, (オンライン), 2020.8.27.

内田由紀子「コロナ後の社会と働き方について——文化心理学的考察」京都徴助っ人研究会夏の例会, (ウエダ本社ビル, 京都市), 2020.8.28.

内田由紀子ほか「人と命と社会」第13回 京都流議定書 Day1 Session3, (オンライン), 2020.9.8.

内田由紀子「こころの『測定』とその応用」オンライン連続セミナー「こころの科学と社会をつなぐ——京都大学『心の先端研究ユニット』からの提案」, (オンライン), 2020.10.15.

内田由紀子「地域コミュニティの社会関係資本と社会規範に関する調査研究」国立大学附置研究所・センター会議 第3部会 (人文・社会科学系) シンポジウム「データからみる地域研究」, (オンライン), 2020.10.23.

西本清一, 徳丸吉彦, 高橋義人, 内田由紀子, 熊谷誠慈「世界に発信する日本の文化力——ニューノーマル時代の基盤構築に向けて」京都スマートシティエキスポ2020, (オンライン), 2020.10.28.

内田由紀子「暮らしの中の幸福を考える」京都スマートシティエキスポ2020, (オンライン), 2020.10.28.

内田由紀子「ビジネスパーソンが考えるべき幸福論」NewsPicks 東京海上日動社内ウェビナー, (オンライン), 2020.10.28.

Uchida, Y. "Culture, Health, and Well-being: A Perspective from Cultural Psychology." Sapient Labs Virtual Symposium: The Future of Mental Health: Measurement, Treatment and Therapies. (Online), 2020.11.2.

内田由紀子「With コロナ/After コロナ時代のハピネス (幸福感) と QoL 向上を実現する“くらしとまち”」Hitachi Social Innovation Forum 2020. (オンライン), 2020.11.5.

内田由紀子「コロナ後の社会における幸福感と働き方」日本新薬(株)・日本新薬グループ共済会共催 ハッピーサポート講演会, (日本新薬本社, 京都市), 2020.11.27.

内田由紀子「日本文化における幸福感を支える要因」スマートシティ・インスティテュートウェビナーシリーズ「地球と市民の Well-Being を考える」, (オンライン), 2020.12.4.

山極壽一, 内田由紀子, 藤田裕之「ウィズコロナ社会に私たちが今なすべきこと」SDGs・レジリエンスフォーラム, (オンライン), 2020.12.19.

内田由紀子「良い『まち』に求められる要件についての文化心理学からの検討」まちとモビリティに関する研究会, (オンライン), 2021.1.12.

前野隆司, 内田由紀子, 関治之「スマートシティの最終目的としての Well-Being」スマートシティ・インスティテュート特別フォーラム「日本型デジタル社会実現に向けたオール・ジャパンサミット」, (オンライン), 2021.1.19.

内田由紀子「こころの『測定』とその応用, 働く人の幸福」JMA 研究交流会「信頼力あげて組織のパフォーマンスを最大化する方法」, (オンライン), 2021.1.19.

内田由紀子, 鷲尾和彦「日本型デジタル社会の『ゴール』指標とは? ポストグローバリズムの『幸福』観」生活総研「社会構想ダイアログ」, 2021.1.22.

内田由紀子「仕事もたらす幸福感とやりがいについて」京都知恵産業創造の森・京大オリジナル ワークショップ, (オンライン), 2021.2.17.

内田由紀子, 畑中千紘, 中山真孝「コロナの中での新しい取り組み, メンタルヘルス」(ディスカッション) 徴助っ人研究会「冬の例会」, (オンライン), 2021.2.19.

内田由紀子「仕事もたらす幸福感とやりがいについて」NewsPicks リコーウェビナー, (オンライン), 2021.2.26.

内田由紀子「コロナ禍における日本の『独立性』と『協調性』のゆくえ」京都広告協会 春期アド・フォーラム (からすま京都ホテル, 京都市), 2021.3.16.

内田由紀子「幸せとは何か? 文化的幸福観から個人と社会の幸せを問い直す」shiwase 2021 シンポジウム, (オンライン), 2021.3.20.

内田由紀子「主観指標を用いた比較文化研究の手法」科学研究費プロジェクト「インフォーマル化するアジア——グローバル化時代のメガ都市のダイナミクスとジレンマ」研究会, (オンライン), 2021.3.24.

新聞・一般雑誌への寄稿・インタビューなど

内田由紀子「開かれた社会への心のあり方を」(元日特集「思い描く, 未来へ」), 京都新聞, 2020.1.1.

内田由紀子, 出口康夫「立ち止まって、考える——パンデミック状況下での人文社会科学からの発信」, 対談シリーズ「立ち止まって、考える」, 京都大学人社未来形発信ユニット Web サイト, 2020.4.25.

内田由紀子「社会を豊かにする価値観とは」(インタビュー企画「価値観と関係性が紡ぎ続ける経済圏」第3回), 『SILK JOURNAL 2020——1000年を超えて, ソーシャル・イノベーションし続ける街』, 京都市ソーシャルイノベーション研究所, 2020.9.1.

Uchida, Y. "Glück ist etwas sehr Vergängliches." *Psychologie Heute*, 2020.9.4.

社会活動等

Stanford University Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences フェロー

文部科学省 科学技術社会連携委員会委員

京都信用金庫 社外(非常勤)理事

京都府農林水産技術センターのあり方分科会委員

京都府普及指導活動外部評議会委員

一般社団法人スマートシティ・インスティテュートエグゼクティブアドバイザー

人生100年時代におけるライフマネジメント研究会委員
公益財団法人国際高等研究所「日本文化創出を考える」研究会委員

吉岡 洋

論文

吉岡洋『『失敗』に親しむ』『こころの未来』, 2020.(23).10-13.
吉岡洋「美学のアップデート その1『無関心性』について」, 佐伯啓
思(監修)『ひらく』, 2020.(4).186-195.
吉岡洋「コロナ下のファルマコン」『ボワゾン・ルージュ3—現代
社会における〈毒〉の重要性2020』2021.5-41.

著書

吉岡洋「こころとアーティフィシャル・マインド」, 河合俊雄, 吉岡
洋, 西垣通, 尾形哲也, 長尾真(著)『『こころ』とアーティフィ
シャル・マインド』創元社, 2021, 12-26頁.

講演

吉岡洋「ティーンズのための美学」劇場の学校(ロームシアター京
都, 京都市)2020.8.9.

一般雑誌への寄稿・インタビューなど

「対談 吉岡洋×木ノ下裕一」ロームシアター京都 開館5周年記念誌,
2021.1.10.
「なぜ, 人はアートに魅かれるの?」(京大×ほととろ コラボ企画
『なぜ, 人は○○なの!』), ウェブマガジン『ほとんど0円大学』,
2020.4.30. http://hotozero.com/feature/kyodaitalk_13/

ラジオ等への出演

「生きづらジオ」第70回, インターネットラジオ番組, 2020.12.31.
<https://youtube.com/yGFg7oG0Dvg>

その他

メールマガジン「well | Diaries | 06.05-06.11」(浅見旬編集)への寄
稿, 2020.6.5-11.
連続討論「メディア変容と新型コロナウイルス」, 2020年6月13日/7
月25日/9月12日/10月10日/12月12日, 『メディア変容と新型コロナ
ウイルス記録集』(2021年3月25日)に収録.
「無駄の研究」(細胞生物学者 吉森保氏とのオンライン対談), KYOTO
EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭, 2021.2.20.

阿部修士

論文

Tei, S., Kauppi, J.-P., Jankowski, K.F., Fujino, J., Monti, R.P., Tohka, J., Abe, N., Murai,
T., Takahashi, H., & Hari, R. "Brain and behavioral alterations in subjects
with social anxiety dominated by empathic embarrassment." *Proceedings of the
National Academy of Sciences of the United States of America*. 2020. 117 (8). 4385-
4391.
阿部修士「正直さと不正直さの脳のメカニズム」『神戸学院大学心理
学研究』2020.2(2).139-150.
Cromwell, H.C., Abe, N., Barrett, K.C., Caldwell-Harris, C., Gendolla, G.H.E.,

Koncz, R., & Sachdev, P.S. "Mapping the interconnected neural systems
underlying motivation and emotion: A key step toward understanding the
human affectome." *Neuroscience and Biobehavioral Reviews*. 2020. 113. 204-226.
Shigemune, Y., Kawasaki, I., Midorikawa, A., Baba, T., Takeda, A., &
Abe, N. "Intrinsic motivation in patients with Parkinson's disease: A
neuropsychological investigation of curiosity using dopamine transporter
imaging." *Neurological Sciences*. 2021. 42. 3349-3356.
Diaz-Rojas, F., Matsunaga, M., Tanaka, Y., Kikusui, T., Mogi, K., Nagasawa, M.,
Asano, K., Abe, N., & Myowa, M. "Development of the paternal brain in
expectant fathers during early pregnancy." *NeuroImage*. 2021. 225. 117527.
Guo, X., Yamashita, M., Suzuki, M., Ohsawa, C., Asano, K., Abe, N., Soshi, T., &
Sekiyama, K. "Musical instrument training program improves verbal memory
and neural efficiency in novice older adults." *Human Brain Mapping*. 2021. 42
(5). 1359-1375.
阿部修士「ヒト脳機能研究におけるfMRIの役割」『バイオメカニズ
ム学会誌』2021.45(1).21-29.
Yanagisawa, K., Kashima, E.S., Shigemune, Y., Nakai, R., & Abe, N. "Neural
representations of death in the cortical midline structures promote temporal
discounting." *Cerebral Cortex Communications*. 2021. 2 (2). tgab013.
Abe, N., Nakai, R., Yanagisawa, K., Murai, T., & Yoshikawa, S. "Effects of
sequential winning vs. losing on subsequent gambling behavior: Analysis of
empirical data from casino baccarat players." *International Gambling Studies*.
2021. 21 (1). 103-118.

著書

柳澤邦昭, 阿部修士「神経科学と社会的認知」唐沢かおり(編)『社
会的認知—現状と展望』ナカニシヤ出版, 2020年, 117-134頁.
阿部修士『あなたはこうしてウソをつく』岩波書店, 2021年.

学会発表

Guo, X., Yamashita, M., Suzuki, M., Ohsawa, C., Asano, K., Abe, N., & Sekiyama,
K. "Effects of Musical Instrument Training Program on Verbal Memory and
Neural Efficiency in the Elderly." 26th Annual meeting of the Organization
for Human Brain Mapping. (Online). 2020. 6.23-7.3.
Soshi, T., Andersson, M., Kawagoe, T., Nishiguchi, S., Yamada, M., Otsuka, Y.,
Nakai, R., Abe, N., Aslah, A., Igasaki, T., Nyberg, L., & Sekiyama, K. "Neural
plasticity with and without short-term exercise-intervention in healthy
elderly people." 26th Annual meeting of the Organization for Human Brain
Mapping. (Online). 2020. 6.23-7.3.
上田竜平, 阿部修士「報酬系における『恋心』に特異的な神経表象」
第22回日本ヒト脳機能マッピング学会, (オンライン), 2020.8.29-30.
上田竜平, 阿部修士「側坐核における恋人の神経表象—マルチボ
クセルパターン解析を用いた検討」日本心理学会第84回大会, (オ
ンライン), 2020.9.8-11.2.
八田紘和, 上田竜平, 蘆田宏, 阿部修士「不正直さに対する潜在的
態度と利己的嘘との関連」日本心理学会第84回大会, (オンライ
ン), 2020.9.8-11.2.
柳澤邦昭, 中井隆介, 杉浦仁美, 八田紘和, 阿部修士「世界の認知
構造を符号化する神経表象—表象類似度解析による検証」日本

社会心理学会第61回大会, (オンライン), 2020.11.7-8.

Hatta, H., Ueda, R., Ashida, H., & Abe, N. "Implicit attitudes toward dishonesty as a predictor of self-serving dishonesty." RIEC International Symposium. When AI Meets Human Science: The 4th Tohoku - NTU Symposium on Interdisciplinary AI and Human Studies. (Online). 2021. 3.12-13.

講演

阿部修士「脳機能画像法による嘘の研究」第5回神経学研究会, (オンライン), 2020.8.10.

阿部修士「道徳的意思決定の心理学」京都大学オンライン公開講義「立ち止まって、考える」, (オンライン), 2020.8.23.

阿部修士「機械学習と脳機能画像法——恋愛感情の神経基盤に関する研究」(シンポジウム:「精神の情報工学——情報技術の臨床応用, ロボットライフレビュー, セラピーの自然言語処理そして, 恋愛感情の脳機能画像法」における話題提供) 第84回日本心理学会, (オンライン), 2020.10.16.

阿部修士「嘘と正直さの認知神経科学」認定心理士の会 北海道支部講演会, (オンライン), 2020.11.1.

阿部修士「不正行為を生み出す脳とところのメカニズム」経営倫理実践研究センター 企業不祥事を克服するための「人の心と行動」の研究会, (オンライン), 2020.11.5.

阿部修士「意思決定のメカニズムと畏」経営倫理実践研究センター 企業不祥事を克服するための「人の心と行動」の研究会, (オンライン), 2020.12.3.

阿部修士「正直さと不正直さの脳のメカニズム——意思決定の科学」日本能率協会 第538回一隅会(経営哲学懇話会), (オンライン), 2021.3.9.

一般雑誌等への寄稿・インタビューなど

「サイコパスは、普通の人とくらべてうそを頻繁につくか?」『Newton』, 2020年9月号, 110頁.

熊谷誠慈

著書

熊谷誠慈「ブータンの実践仏教と国民総幸福(GNH)」, 船山徹(編)『現代社会の仏教』(シリーズ実践仏教5), 京都:臨川書店, 2020年, 91-163頁.

研究会発表

熊谷誠慈「仏教的ところ観からコロナ危機を考える」, 第5回京都ところ会議研究会(京都大学, 京都市), 2021.1.5.

講演

Kumagai, S. "Rethinking Child Welfare in Countries with a Single-Custody System: Bhutan and Japan. Compared to the West." 2nd International Workshop on Himalayan Law, Politics and Buddhist Ethics. (University of Vienna, Vienna). (Online). 2021.1.18.

熊谷誠慈「仏教のところ観から考えるコロナ危機」, 第5回京都ところ会議シンポジウム, (京都大学, 京都市), (オンライン), 2021.2.21.

Kumagai, S., Furuya, T., Higashifushimi, K., Yasuda, A., Matsushita, T.G.,

Kameyama, T., & Hasegawa, Y. "Using Traditional Wisdom with AI (Buddhism) to Establish a 'Psyche Navigation System'." RIEC International Symposium. When AI Meets Human Science: The 4th Tohoku - NTU Symposium on Interdisciplinary AI and Human Studies. (Online). 2021.3.12.

メディア

NHKニュース, 2021.3.26. (仏教対話AI『ブッダボット』の紹介)

NHKニュース, 2021.3.27. (仏教対話AI『ブッダボット』の紹介)

TBSラジオ, 2021.3.29.『赤江珠緒たまむすび』「週刊ニッポンの空気が」(仏教対話AI『ブッダボット』の紹介)

朝日新聞, 2021.3.27.社会面コラム. (仏教対話AI『ブッダボット』紹介記事)

京都新聞, 2021.3.27.社会面3, 31頁. (仏教対話AI『ブッダボット』紹介記事)

"AI 'Buddhobot' unveiled in Kyoto dispenses advice to troubled souls." Asahi Shimbun. 2021.3.29. <http://www.asahi.com/ajw/articles/photo/38954863>

"AI 佛法大師 佛経道理を善信解憂," 即時新聞(中国語), 2021.3.27. https://hk.on.cc/hk/bkn/cnt/intnews/20210327/bkn-20210327213028488-0327_00992_001.html

"人工智能傾佛偈助解煩憂," 昔日東方(中国語), 2021.3.28. https://orientaldaily.on.cc/cnt/china_world/20210328/00180_035.html

「仏教経典学んだAI悩みに答えるシステム開発 京大研究グループ」NHK NEWS WEB. NHK. 2021.3.27. <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210327/k10012938991000.html>

「現代人の悩みに仏教AIが答える『ブッダボット』を京大などが開発」ABCニュース, 朝日放送, 2021.3.26. https://www.asahi.co.jp/webnews/pages/abc_10110.html

「悩みに答える仏教AI『ブッダボット』開発 京大」, 朝日新聞, 2021.3.26. <https://www.asahi.com/articles/ASP3V5HHJP3VPLBJ001.html>

「釈迦ならどう答える? 仏教対話AI『ブッダボット』京大など開発」, 京都新聞, 2021.3.26. <https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/537180>

上田祥行

論文

Higuchi, Y., Ueda, Y., Shibata, K., & Saiki, J. "Spatial variability induces generalization in contextual cuing." *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 2020. 46(12), 2295-2313.

Sakata, C., Ueda, Y., & Moriguchi, Y. "Learning of spatial configurations of a co-actor's attended objects in joint visual search." *Acta Psychologica*. 2021. 215. Article 103288.

上田祥行「形態処理を超えた顔認知メカニズムの発達の解明に向けて」(コメント論文)『ベビーサイエンス』2021.20.16-17.

著書

上田祥行「表情がもたらす二者関係の印象」, 東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター(編)『顔の実験心理学(2)——顔では決まらない顔の印象』(Humanities Center Booklet Vol.7), 東

京大連携研究機構ヒューマニティーズセンター, 2021年, 40-63頁.

上田祥行, 北山忍「文化は認識に影響するか——顔身体との兼ね合いで」, 河野哲也他(編著)『顔身体学ハンドブック』東京大学出版会, 2021年, 257-267頁.

学会発表

Ueda, Y., "Volitional attention guidance fails to extract summary statistics." Vision Sciences Society 20th Annual Meeting. (Online). USA. 2020.6.19-24.

Simonson, T. L., Kumakiri, S., Yu, Y., Ueda, Y., Saiki, J., & Loschky, L. C., "What besides the film guides viewers' attention while watching films? The roles of culture and task." The Society for Cognitive Studies of the Moving Image 2020. (Online). 2020.6.20.

Ueda, Y., & Saito, S., "The Hebb repetition effect in reproduction of nonverbal rhythms." The 10th European Working Memory Symposium. (Online). 2020.9.1.

坂田千文, 上田祥行, 森口佑介「並行行為場面における他者のターゲット位置の学習に関する検討」日本心理学会第84回大会, (オンライン), 2020.9.8-11.2.

Simonson, T. L., Yu, Y., Kumakiri, S., Weigel, A., Royg-Quevedo, J., Ueda, Y., Saiki, J., & Loschky, L. C., "Mandatory versus volitional attentional selection during film viewing: The roles of culture and cognitive load on attention." Psychonomic Society's 61st Annual Meeting. (Online). 2020.11.19-22.

上田祥行「認知実験の文化比較——異なる背景を持つ人の成績を比較するために考えること」日本認知心理学会第18回大会 ベーシック&フロンティアセミナー, (オンライン), 2021.3.2.

上田祥行, 齋木潤「視覚探索の個人差を決める要因」日本認知心理学会第18回大会, (オンライン), 2021.3.4.

上田祥行, 大塚幸生, 齋木潤「オントロジーによる心理実験データベースの作成」第19回「注意と認知」研究会, (オンライン), 2021.3.8.

坂田千文, 上田祥行, 森口佑介「他者を行う共同探索が統計学習に与える影響」第19回「注意と認知」研究会, (オンライン), 2021.3.8.

講演

Ueda, Y., "Experience and Environmental Matters in Human Visual Cognition." The 4th Tohoku - NTU Symposium on Interdisciplinary AI and Human Studies. (Online). 2021.3.13.

受賞

第18回日本認知心理学会優秀発表賞「総合性評価部門」, 発表日 2021.3.4 (受賞日 2021.6.12.)

清家 理

論文

Seike, A., & Takeuchi, S., "Teamwork skills." *Self-management: For Individual and Organizational Success*. 2021, 25-37. Partridge.

Seike, A., "Self-awareness." *Self-management: For Individual and Organizational Success*. 2021, 89-100. Partridge.

著書

清家理「聯結の可能性——毎個人が正照看者他人」In 郭子菱, 宮木由貴子, 的場康子, 稻垣圓 (Eds.). 『設計你的幸福人生：從家庭到消費, 看準社會五大趨勢, 畫出你的未來藍圖』, 2020. pp.157-160, 寶鼎.

清家理 (分担執筆), 家族支援ガイドライン作成委員会 (監修), 矢吹知之, 長田久雄, 加藤伸司 (編著) 『認知症の人と家族を支えるガイドブック』, ワールドプランニング社, 2021年, 46-47頁, 78-79頁, 86-87頁, 130-131頁, 152-156頁.

清家理「地域で支える取り組み・連携——治し・支える医療にむけて」, 葛谷雅文, 楽木宏実 (監修), 荒井秀典 (編) 『生活習慣病と健康長寿・フレイル対策』先端医学社, 2021年, 125-131頁.

竹内さやか, 清家理「患者さん・ご家族のケア」, 鳥羽研二 (監修), 櫻井孝, 服部英幸, 武田章敬, 佐治直樹 (編) 『認知症サポート医・認知症初期集中支援チームのための認知症診療ハンドブック』南江堂, 2021年, 137-139頁.

清家理「相談を通じた治療・ケアへの参画」, 鳥羽研二 (監修), 櫻井孝, 服部英幸, 武田章敬, 佐治直樹 (編) 『認知症サポート医・認知症初期集中支援チームのための認知症診療ハンドブック』南江堂, 2021年, 171-173頁.

清家理「家族介護者の学びあいを通じた治療・ケアへの参画——家族教室」, 鳥羽研二 (監修), 櫻井孝, 服部英幸, 武田章敬, 佐治直樹 (編) 『認知症サポート医・認知症初期集中支援チームのための認知症診療ハンドブック』南江堂, 2021年, 174-177頁.

講演

清家理「コロナ禍における認知症の人を支える社会システムのあり方」第5回Care TEX大阪2020 専門セミナー講演 (インテックス大阪, 大阪市), 2020.11.19.

清家理「家族・介護者のケア」公益社団法人老人保健施設協会 2020年度老人保健施設管理医師総合診療研修会, (オンライン), 2021.

新聞・一般雑誌記事掲載

「親の“老い”にどう向き合う？」LIVING kyoto WEB, 京都リビング新聞社, 2020.10.16.

医療健康特集「認知症の人と家族参加型のサロン——認知症進行予防をめざすプログラムと臨床研究」, 中日新聞, 2021.2.3.

その他(公的機関の刊行物への従事)

「こうふくプラン向日」(第9次向日市高齢者福祉計画・第8期向日市介護保険事業計画), 向日市, 2021.

その他(外部委員)

向日市地域包括支援センター運営協議会会長

向日市高齢者福祉計画及び介護保険事業計画策定委員会委員長

京都府アドバンス・ケア・プランニング推進ワーキング委員会学術専門家委員

厚生労働省専門委員会「認知症の人の家族が認知症を正しく理解し適切な対応につなげるための取組の普及促進に関する調査研究事業」委員

中井隆介

論文

- Nakai, R., Azuma, T., Nakaso, Y., Sawa, S., & Demura, T., "Development of a dynamic imaging method for gravitropism in pea sprouts using clinical magnetic resonance imaging system." *Plant Biotechnology*, 2020, 37(4), 437-442.
- Yanagisawa, K., Kashima, E.S., Shigemune, Y., Nakai, R., & Abe, N., "Neural representations of death in the cortical midline structures promote temporal discounting." *Cerebral Cortex Communications*, 2021, 2(2), tgab013.
- Abe, N., Nakai, R., Yanagisawa, K., Murai, T., & Yoshikawa, S., "Effects of sequential winning vs. losing on subsequent gambling behavior: analysis of empirical data from casino baccarat players." *International Gambling Studies*, 2021, 21(1), 103-118.

学会発表

- 中井隆介「MRIを用いた新しい植物微細構造解析法の開発」[植物構造オプト] 第3回班会議, (オンライン), 2020.5.23.
- Soshi, T., Andersson, M., Kawagoe, T., Nishiguchi, S., Yamada, M., Otsuka, Y., Nakai, R., Abe, N., Aslah, A., Igasaki, T., Nyberg, L., & Sekiyama, K., "Neural plasticity with and without short-term exercise-intervention in healthy elderly people." 26th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping (Online), 2020.6.23-7.3.
- Nakai, R., Yamaguchi, S., Toda, M., Azuma, T., & Iwata, H., "Analysis of changes in magnetic susceptibility artifacts due to static magnetic field strength, imaging sequence and chemical composition." ISMRM 28th Annual Meeting & Exhibition, (Online), 2020.8.8-14.
- 松本奈々恵, 中井隆介, 猪野正志, 三谷章「健常者の身体イメージの形成に関わる脳領域の探索」第31回日本老年医学会東海地方会, (オンライン), 2020.10.3.
- 柳澤邦昭, 中井隆介, 杉浦仁美, 八田紘和, 阿部修士「世界の認知構造を符号化する神経表象——表象類似度解析による検証」日本社会心理学会第61回大会, (オンライン), 2020.11.7-8.
- 福元喜啓, 谷口匡史, 八木優英, 廣野哲也, 山縣桃子, 中井隆介, 山田陽介, 木村みさか, 池添冬芽, 市橋則明「骨格筋超音波エコー輝度とDixon法による筋内脂肪割合との関連——超音波撮像におけるフォーカス位置の違いによる検討」第25回日本基礎理学療法学会学術大会, (オンライン), 2020.12.12-13.
- 浅山章大, 谷口匡史, 八木優英, 福元喜啓, 廣野哲也, 山縣桃子, 中井隆介, 市橋則明「超音波診断装置による膝蓋骨アライメント計測の信頼性と妥当性の検証」第25回日本基礎理学療法学会学術大会, (オンライン), 2020.12.12-13.
- 谷口匡史, 山田陽介, 八木優英, 中井隆介, 建内宏重, 市橋則明「多周波生体電気インピーダンス法による大腿筋量および大腿四頭筋量の推定モデルの確立」第25回日本基礎理学療法学会学術大会, (オンライン), 2020.12.12-13.

畑中千紘

論文

- Hatanaka, C., "The Suppression and Avoidance of Aggression among the Young Generation in Contemporary Society: Stress-Avoidance Response in the Picture-Frustration Study." *Psychologia*, 2020, 62(2), 126-139. <https://doi.org/10.2117/psysoc2020-B012>
- Kawai, T., Suzuki, Y., Hatanaka, C., Konakawa, H., Tanaka, Y., & Uchida, A., "Gender Differences in Psychological Symptoms and Psychotherapeutic Processes in Japanese Children." *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 2020, 17(23), 9113. <https://doi.org/10.3390/ijerph17239113>

著書

- 杉原保史, 宮田智基, 畑中千紘, 樋口隆弘(編)『SNSカウンセリング・ケースブック——事例で学ぶ支援の方法』誠信書房, 2020年.
- Hatanaka, C., "Agency, a Japanese Cultural Complex: Transformation of Jungian-Oriented Psychotherapy in an Age of Weaker Agency." In Singer, T. (Ed.) *Cultural Complexes in China, Japan, Korea, and Taiwan: Spokes of the Wheel*. Routledge: London, 2020, pp.163-180.

学会発表

- Hatanaka, C., "The healing power of personal narrative: A meta analysis of the cases of psychotherapy." The Narratives in times of radical Transformation Conference (Kyoto University/ Technische Universität Berlin), (Online), 2020.11.19-20.

講演

- 畑中千紘「子どものこころの変化と食の関わりについて」東大阪市令和2年度栄養教諭・学校栄養職員研修(資料配付型), 2020.6.5.
- 畑中千紘「臨床心理学からみた日本のこころの今」京都大学SDGs研究会2020, (オンライン), 2020.9.11.
- 畑中千紘「企業とこころの科学の接点」オンライン連続セミナー「こころの科学と社会をつなぐ——京都大学『心の先端研究ユニット』からの提案」, (オンライン), 2020.11.11.
- 畑中千紘「対面心理相談の基礎とSNSカウンセリング」内閣府主催令和2年度「子ども・若者支援地域協議会構成機関等における相談業務に関する研修(国立オリンピック記念青少年総合センターに遠隔配信)」, (オンライン), 2020.11.16.
- その他
- 畑中千紘「片付けという分離課題——藤生論文へのコメント」東洋英和女学院大学心理相談室紀要, 2020.24.150-153.

鈴木優佳

論文

- Kawai, T., Suzuki, Y., Hatanaka, C., Konakawa, H., Tanaka, Y., & Uchida, A., "Gender differences in psychological symptoms and psychotherapeutic processes in Japanese children," *International Journal of Environmental Research and Public Health*

Health, 2020.17(23),9113.

その他

鈴木優佳「セラピストの主観的変数は力動的心理療法の結果に影響するののか? ——文献レビュー」『精神療法』2020.46(3),430-431.

中山真孝

論文

Saito, S., Nakayama, M., & Tanida, Y., "Verbal working memory, long-term knowledge, and statistical learning," *Current Directions in Psychological Science*, 2020.29(4),340-345.

中山真孝「Aweと意味生成」『心理学評論』2020.63(1),28-43.

前浦菜央, 中山真孝, 内田由紀子「日本における感動とAweの弁別性・類似性」『認知科学』, 2020.27(3),262-279.

Nakayama, M., Nozaki, Y., Taylor, P.M., Keltner, D., & Uchida, Y., "Individual and cultural differences in predispositions to feel positive and negative aspects of awe," *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 2020.51(10),771-793.

Hamada, D., Nakayama, M., & Saiki, J., "Wisdom of crowds and collective decision-making in a survival situation with complex information integration" *Cognitive Research: Principles and Implications*, 2020.5, Article number: 48.

Nakayama, M., & Uchida, Y., "Meaning of awe in Japanese (con) text: Beyond fear and respect," *Psychologia*, 2020.62(1),46-62.

学会発表

Koh, A. H. Q., Nakayama, M., & Uchida, Y., "The role of Kamamuta in times of threat," The 2020 Society for Affective Science virtual Meeting, (Online), 2020.4.24-5.28.

Nakayama, M., & Uchida, Y., "Finding meaning after a natural disaster: Threat-based awe triggers meaning making," The 2020 Society for Affective Science virtual Meeting, (Online), 2020.4.24-5.28.

Bowen, K.S., Uchida, Y., Takemura, K., Nakayama, M., & Ito, A., "Living alone in interdependent cultural contexts: Lower well-being is mediated by reduced social integration," Society for Personality and Social Psychology Annual Convention, (Online), 2021.2.9-2.13.

Uchida, A., Nakayama, M., & Uchida, Y., "How is workplace contribution and reward attributed in Japanese compared to European American cultural contexts?" Society for Personality and Social Psychology Annual Convention, (Online), 2021.2.9-2.13.

武藤拓之

論文

Kurihara, Y., & Muto, H., "Behavioral responses of Japanese macaques to playback-simulated intergroup encounters," *Behavioural Processes*, 2021, 182, Article 104279.

武藤拓之「ベイズ統計モデリングの有用性を示す認知心理学研究の紹介——個人間・試行間のばらつきを理解する」『認知科学』2021.28(1),182-187.

武藤拓之「実験心理学者のための階層ベイズモデリング入門——RとStanによるチュートリアル」『基礎心理学研究』2021.39(2),196-212.

学会発表

武藤拓之「心的回転に対するdiffusion modelingの有効性の検証」日本行動計量学会第48回大会（早稲田大学，東京都），2020.9.1-4.

※ COVID-19により中止。みなし発表扱い。

武藤拓之「Spatial Orientation Testの得点化方法の改善——フォン・ミーゼス分布による角度データのモデリング」日本心理学会第84回大会（東洋大学，東京都），（オンライン），2020.9.8-11.2.

武藤拓之，難波修史「心理学の諸領域におけるベイズ統計モデリングの実践（公募シンポジウムの企画）」日本心理学会第84回大会（東洋大学，東京都），（オンライン），2020.9.8-11.2.

武藤拓之「まずはオープンデータから！——高めよう信用性，広めよう二次分析（大会企画シンポジウム：「若手が聞きたい再現可能性問題の現状とこれから」における話題提供）」日本心理学会第84回大会（東洋大学，東京都），（オンライン），2020.9.9.

Muto, H., "Correlational evidence for the adoption of egocentric mental rotation in same/different comparisons of human-like objects." The Psychonomic Society's 61st Annual Meeting, (Online), 2020.11.19.

神原歩，武藤拓之「空間的視点取得と他者の心的経験の推測との関連——透明性錯覚パラダイムを用いて」日本認知心理学会第18回大会（金沢工業大学，野々市市），（オンライン），2021.3.3.

Kobayashi, H., Muto, H., Shimizu, H., & Ogawa, H., "Effects of interstimulus spacing on flanker interference investigated by hierarchical diffusion modeling," The 18th Conference of the Japanese Society for Cognitive Psychology (Kanazawa Institute of Technology, Nonoichi), (Online), 2021.3.4.

武藤拓之，永井聖剛「他者の聴空間知覚の理解を支える身体化プロセス——視空間的視点取得との共通性」日本認知心理学会第18回大会（金沢工業大学，野々市市），（オンライン），2021.3.4.

武藤拓之「心的回転課題の認知モデリング——傾いた文字の正像・鏡像判断における混合プロセス仮説の検証（ワークショップ：「古典的な実験課題を用いた認知モデリング」の企画および話題提供）」日本認知心理学会第18回大会（金沢工業大学，野々市市），（オンライン），2021.3.4.

講演

武藤拓之「知覚・認知心理学における数理・統計モデリングの意義と実践」特別講義（慶應義塾大学，東京都），（オンライン），2020.11.12.

受賞

日本心理学会学術大会特別優秀発表賞，2020.10.20.

* 今回の仕事一覧の対象となる2020年度は、新型コロナウイルス感染症流行のため学会や講演会などがオンラインで開催されたケースが多く、その場合は原則として（オンライン）(Online)のように記載し、発表日もオンラインによる学会の開催期間を記載している場合があります。

●2020年10月1日 Kimberly Suzanne BOWENが特定准教授に着任。

●10月1日・15日・22日、11月5日 『日本仏教セミナー (八宗綱要)』(於：稲盛財団記念館3階中会議室・稲盛財団記念館1階京都賞ライブラリーセミナー室) コーディネーター：熊谷誠慈、安田章紀 企画・進行：熊谷誠慈 参加者数：各回30名

●10月28日 2020年第4回京都こころ会議研究会「憑依とパトス——文化人類学の視点から」(オンライン開催) 講師：石井美保(京都大学人文科学研究所准教授) 企画・進行：河合俊雄 参加者数：16名

●11月19日・20日 ベルリン工科大学、国際分析心理学会、IASS (Institute for Advanced Sustainability Studies)、こころの未来研究センター共同開催「Narratives in times of radical Transformation Conference」(オンライン開催) Session 1 : Regina Renn (German Society for Analytical Psychology), Christian Roesler (Professor, Catholic University of Freiburg) 「A Jungian perspective on transformations」 Short papers- Psychological approaches to narratives and transformations : Bartosz Samitowski, 畑中千紘、粉川久枝、Robin B. Zeiger, Timothy N. W. Jackson、Päivi Alho、Sonja Geiger. Session 2 : Ortwin Renn (Scientific Director, IASS), David Maggs (Great Transition Initiative, Cambridge, USA) 「Narratives as drivers of social change」 Short papers – Narratives as change agents for communities and social groups : Adina Nicu, Oscar Schmidt, Nancy van den Berg-Cook, Melanie Jaeger-Erben, Tamina Hipp, Saša Božić, Tom Bruhn. Session 3 : Hans-Liudger Dienel (Professor, Berlin University of Technology), Johan Schot (Professor, Global



12月6日 2020年度こころの未来研究センター研究報告会「動物のこころ・こころの中の動物」

History and Sustainability Transitions, Centre for Global Challenges, Utrecht University) 「Role of narratives in socio-technological transformations」 Short papers – Narratives as facilitators of technological change : Sophia Becker, Helmut Trischler, Lisa Ruhort, Alice Vadrot, Tze-Luen Lin. Final Session : 河合俊雄 「Narratives in various contexts: Commonalities, differences, distinctions "What have we learned?"」 参加者数：各70名

●12月6日 2020年度こころの未来研究センター研究報告会「動物のこころ・こころの中の動物」(オンライン開催) 研究報告1：幸島司郎(京都大学野生動物研究センター教授)「動物の行動を理解する」

研究報告2：小村豊「動物の意識を探る」 研究報告3：鈴木優佳「心理療法における動物」 ディスカッション：大坪庸介(神戸大学大学院人文学研究科教授)、仲野徹

(大阪大学大学院医学研究科/生命機能研究科教授) 参加者数：60名

●12月6日 上廣倫理財団寄付研究部門2020年度研究報告会「仏教から考えるコロナ時代の生き方」(オンライン開催) 上廣倫理財団寄付研究部門の取組紹介、および研究報告1：広井良典 研究報告2：清家理 研究報告3：畑中千紘 パネルディスカッション：熊谷誠慈「仏教にみるコロナ時代の生き方」、手嶋英貴(京都文教大学総合社会学部教授)「時代の転換期：インドの循環的宇宙論を中心に」、菊谷竜太(京都大学白眉センター特定准教授)「疫病とブッダ——インド仏教における防護聖典と呪文効能定型句」 指定討論者：



12月6日 上廣倫理財団寄付研究部門2020年度研究報告会「仏教から考えるコロナ時代の生き方」



1月5日 2020年第5回京都こころ会議研究会「仏教的こころ観からコロナ危機を考える」



2月21日 第5回京都こころ会議シンポジウム「こころとコロナ危機」

広井良典、亀山隆彦 企画・進行：熊谷誠慈 参加者数：144名

●12月17日 鎮守の森コミュニティセミナー（収録配信）報告1：宮下佳廣（一般社団法人鎮守の森コミュニティ推進協議会代表理事）「鎮守の森コミュニティプロジェクトの具体的動向」報告2：田中朋清（石清水八幡宮権宮司）「鎮守の森の意義（含SDGsとの関わり）」報告3：宮越純一（株式会社日立製作所研究開発グループ基礎研究センター 日立京大ラボ主任研究員）「宮崎県高原町での展開（自然エネルギーの地産地消と経済効果）」報告4：中井徳太郎（環境省環境事務次官）「『気候危機』と『コロナ危機』を踏まえた地域循環共生圏の創造」ディスカッサント：広井良典、宮下佳廣、田中朋清、宮越純一、中井徳太郎 企画・進行：広井良典 合計視聴回数：869回（2021年12月付）

●12月25日 学術広報誌『こころの未来』第24号（特集「生命のひろがり」）刊行。

●2021年1月5日 2020年第5回京都こころ会議研究会「仏教的こころ観からコロナ危機を考える」（オンライン開催）講師：熊谷誠慈 企画・進行：河合俊雄 参加者数：16名

●1月13日 2020年第3回京都こころ会議研究会「牛の健康から人の健康へ：農村の自殺の社会的決定要因の探索」（2020年10月21日開催予定を延期、オンライン開催）講師：金森万里

子（東京大学大学院医学系研究科・博士課程3年）企画・進行：河合俊雄 参加者数：18名

●2月9日 政策研究セミナー「AIを活用した社会構想と政策提言——展望と課題」（収録配信）報告1：広井良典「政策提言AIをめぐる展開と可能性」報告2：福田幸二（株式会社日立製作所研究開発グループ東京社会イノベーション協創センター主任研究員）「政策提言AIの仕組みと活用——未来シナリオの可能性の束とシナリオ分岐点の導出」報告3：須藤一磨（株式会社日立コンサルティング・コンサルタント）「演題未定政策提言AIを活用したコンサルティング事例」報告4：岩切玄太郎（兵庫県企画県民部ビジョン局ビジョン課副課長）「兵庫県における政策提言AIの活用」ディスカッサント：広井良典、福田幸二、須藤一磨、岩切玄太郎 企画・進行：広井良典 合計視聴回数：534回（2021年12月付）

●2月21日 第5回京都こころ会議シンポジウム「こころとコロナ危機」（オンライン開催）講演1：山本太郎（長崎大学熱帯医学研究所教授）「Withコロナ時代の見取り図」講演2：熊谷誠慈「仏教的こころ観から考えるコロナ危機」講演3：田中康裕（京都大学大学院教育学研究科教授）「コロナ危機と心理療法」ディスカッサント：山本太郎、熊谷誠慈、田中康裕、河合俊雄 企画・進行：河合俊雄 参加者数：344名

●2月26日 2020年度市民講座「無と意識の人類史——生と死のグラデーション」（収録配信）講師：広井良典 講義1：「生と死のグラデーション——死生観の再構築」講義2：「無と意識の人類史——私たちはどこへ向かうのか」企画・進行：広井良典 合計視聴回数：1910回（2021年12月付）

●3月3日・4日 上田祥行特定講師、齋木潤教授（京都大学大学院人間・環境学研究科）の発表題目『視覚探索の個人差を決める要因』が日本認知心理学会第18回大会で「優秀発表賞」を受賞。

●3月12日・26日 熊谷誠慈、古屋俊和（Quantum Analytics Inc. CEO）、東伏見光晋（青蓮院門跡執事長）らの研究グループが、現代人の悩みや社会課題に対して仏教的観点から回答する仏教対話AI「ブダボット」を3月12日に開催されたRIEC国際シンポジウム「When AI Meets Human Science」において公表、また、3月26日に京都大学にて記者会見を開催。